

「て」を用いる日本語原文とその中国語対訳

注:分類欄に記載されている記号は次の意味を表す。  
A=「原因・理由を表すもの」、B=「接続機能を持つもの」、C=「無標」

原文		訳文		分類一覧			作品名
会話文	地の文	会話文	地の文				
	の時勘太郎は逃げ路を失って、一生懸命に飛びかかって来た。		①当时, 勘太郎无路可逃, 拼命扑过来。②当时, 勘太郎走投无路, 拼命地朝我扑来。③当时, 勘太郎无路可逃, 就拼命向我扑来。	C	B-2	B-1	坊ちゃん
	勘太郎が落ちるときに、おれの袷の片袖がもげて、急に手が自由になった。		①勘太郎摔下去的时候, 我的一只袖子被撕掉了, 胳膊顿时自由起来。②勘太郎跌下去的时候, 顺势扯走了我一只夹衣袖子, 这下我的手才自由了。③勘太郎在跌下去的时候, 扯断了俺夹衫的一只袖子, 俺的胳膊这才听使唤了。	C	B-6	B-15	坊ちゃん
	この兄はやに色が白くって、芝居の真似をして女形になるのが好きだった。		①我的这个哥哥皮肤白得出奇。他爱学唱戏, 总是喜欢扮演旦角。②我这个哥哥, 皮肤特别白皙, 喜欢学戏里的旦角。③俺哥长得白白的, 喜欢模仿演戏, 扮成花旦。	C	C	C	坊ちゃん
	十年来召し使っている清と云う下女が、泣きながらおやじに詫まって、漸くおやじの怒りが解けた。		①谁知十年来一直在我家做工的名叫阿清的女佣, 哭着向父亲求情, 这才使她息怒。②多亏在俺家待了十年的、一个叫清婆的女佣人, 哭着替俺向俺爹赔不是, 才使俺爹的火气消了。③是, 十年来一直在我家当女仆的阿清婆哭着向爹说情, 总算让爹消了气。	B-15	B-6	B-16	坊ちゃん
	この下女はもと由緒のあるものだったそうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公までする様になったのだと聞いている。		①听说这女人原是名门出身, 江戸幕府瓦解时, 家道零落, 到头来只好帮人做工了。②听说这个女佣人原本是出身于一个相当不错的门庭, 在“世变”时没落了, 只得出来帮工。③据说这个女仆原是豪门出身, 幕府倒台时, 家道衰落, 最后只得出来当佣人。	B-9	B-8	B-8	坊ちゃん
	汽車が余っ程動き出してから、もう大丈夫だろうと思って、窓から首を出して、振り向いたら、やっぱり立っていた。		①火车开动好一会了, 我想大概不要紧了。谁知从车窗探头向后一望, 阿清依然站在那儿, ②火车开动后, 又过了一会, 俺想这时她该转身去了吧, 俺探出身子, 扭过头去一看, 她仍然站在那里。③火车开出去一段之后, 心想这该不要紧了吧。于是从窗口探出头来, 回过去一看, 阿清婆还站在那里。	C	C	A-38	坊ちゃん
	それ見ると益得意になって、べらめい調を用いたら、		①“怎么样?”我越来越得意, 连东京地方骂人的粗鲁话也带出来了。②俺心想:“这一招果然灵”, 便更加得意起来, 连“江戸儿”吊儿郎当的语调也用上了。③叫你们知道知道我的厉害!我心里更加得意了, 于是撒起了东京腔。	B-17	B-17	A-38	坊ちゃん
	壁は煤で真黒だ。天井はランプの油煙で燻ぼってるのみか、低くって、思わず首を縮める位だ。		①墙壁被煤烟熏得漆黑, 天花板经煤油灯烟熏火烤, 黑糊糊的, 又低, 走在下面, 不禁缩起脖颈。②再看顶棚, 不只挂着的煤油灯在冒油烟, 而且低得让你不由得缩起脖子来。墙上被煤烟熏得漆黑。③天花板不仅被油灯烟熏黑了, 而且很低, 几乎要使人缩着脖子走动。	C	C	C	坊ちゃん
	学校には宿直があって、職員が代る代るこれをつとめる。		①学校有值班制度, 教职员轮流担当。②学校里有值宿制, 由教员轮流担任。③学校里夜间值班制度, 由教职员轮流承担。	C	C	C	坊ちゃん
	ざらざらして蚤の様でもないからこいつあと驚ろいて、足を二三度毛布の中で擦ってみた。		①扎扎拉拉地不象跳蚤。哎呀, 我吓了一跳, 两腿在毛毯里抖落了好几下。②硬梆梆的不象是跳蚤。俺惊叫了一声“唉呀”, 把两腿在毛毯中抖落了一下。③涩拉拉的, 又不象是跳蚤。我吓了一跳, 用脚在毯子里踢了两三下。	C	C	C	坊ちゃん
	廊下のはずれから月がさして、遥か向うが際どく明るい。		①月光从走廊的一头照进来, 远远望去一片明净。②月光从走廊的一头射进来, 远处的那一头, 亮得出奇。③月光从走廊的尽头射过来, 老远望去, 那边还是顶清楚的。	C	C	C	坊ちゃん
	おれが馳け出して二間も来たかと思うと、廊下の真中で、堅い大きなものに向脛をぶつけて、あ痛いが頭へびびく間に、身体はすとんと前へ抛り出された。		①我刚跑出一丈多远, 来到走廊中央, 小腿撞在又粗又硬的东西上, 感到一阵剧痛, 身子早已栽倒在地。②俺约莫刚跑了一丈多远, 就在走廊中间, 小腿一下子撞上了一个又大又硬的东西, 使俺感到痛彻骨髓, 同时身子咚的往前栽去。③我跑出去不到一丈远, 在走廊当中胫骨碰上了个硬硬的大东西, 刚觉着真痛, 身子已经扑地一下向前倒去。	C	B-5	C	坊ちゃん
	じれったいから、一本足で飛んで来たから、もう足音も人声も静まり返って、森としている。		①我急不可耐, 一只脚跳着走过去。这时顿足声和呼喊声都消失了, 周围鸦雀无声。②俺又急又气, 使用一条腿蹦去, 到尽头一看, 脚步声和人声皆无, 变得静悄悄的。③急得我一只脚往前跳, 却已经脚步声、吵声又都没有了, 周围安静极了。	C	C	C	坊ちゃん
	宿直をして鼻垂れ小僧にからかわれて、手のつけ様がなくって、仕方がないから泣き寐入りにしたと思われちゃ一生の名折れた。		①值班时被一帮子拖鼻涕的毛孩子作弄得好苦, 又无法对付, 只能忍气吞声睡大觉。人家要是知道了, 这是一辈子的羞耻。②如果让人家认为, 在俺值宿的时候, 受到乳臭未干的毛孩子们的戏弄, 而俺竟拿他们毫无办法, 不得已只好好饮气吞声, 那将是俺一辈子的耻辱。③若让人认为我在值班时, 被拖着鼻涕的小鬼捉弄得毫无办法, 无耐只好忍气吞声, 那我一生的名誉就扫光了。	C	C	C	坊ちゃん

原文		訳文		分類一覧			作品名
会話文	地の文	会話文	地の文				
	そのうち最前からの疲れが出て、ついうとうと寐ってしまった。		①不知不觉疲倦起来，终于昏昏沉沉地睡着了。②就在这个当儿，刚才折腾后的困倦袭了上来，俺不由得迷迷糊糊地打起盹来。③渐渐地困劲儿上来了，不觉昏昏睡着了。	C	C	C	坊ちゃん
	さあおれの部屋まで来いと引立てると、弱虫だと見えて、一も二もなく尾いて来た。		①“走，到我房里来！”我拖着 he 走。看来是个胆小鬼，他顺从地跟我来了。②俺说：“好吧，你们到俺的房间里来！”便把他们押了回来。看来，这两个都是窝囊废，立刻就跟来了。③“走，到我房间里去！”说着就要把他带走。看上去这是个胆小鬼，老老实实地跟着来了。	C	C	C	坊ちゃん
	こう思ったが向うは文学士だけに口が速者だから、議論じゃ叶わないと思って、だまっていた。		①我心中虽这么想，但对方是文学士，能说会道，争论起来敌不过他，所以就闷声不响了。②俺心里虽然这样想，但对方是个文学士，能说会道，争论起来，当然敌不过他，所以俺什么也没说。③我虽这么想，可对方是文学士，能说会道，辩论起来，我肯定不是对手，只好默不作声。	A-36	A-36	B-9	坊ちゃん
	船頭に聞くとこの小魚は骨が多くって、まずくって、とても食えないんだぞう		①问了船夫，据说这种小鱼刺多，味道差，根本不能吃，②俺问了船老大，据说这种小鱼，又不中吃，刺又多，是根本不能吃的，③我问了问船夫，据说这种小鱼刺多，味道不佳，很难吃，	C	C	C	坊ちゃん
	青空を見ていると、日の光が段々弱って来て、少しはひやりとする風が吹き出した。		①我仰望青空，阳光渐渐弱了，海风阵阵，略带寒意。②望了望蔚蓝色的天空，阳光正逐渐在减弱，风刮起来了，微带着嗖嗖的凉意。③看看天空，阳光渐渐弱下来了，海上吹起了略带凉意的风。	C	C	C	坊ちゃん
	ところへ待ちかねた、うらなり君が気の毒そうに這入って来て少々用事がありまして、遅刻致しましたと慇懃に狸に挨拶をした。		①不久，为大家所等待的老铁君怪不好意思地进来了。他殷勤地向狐狸打着招呼，说有点要紧事要办，所以迟到了。② 就在这时，等得已久的“老铁”君，可怜巴巴的走了进来，恭恭敬敬地朝着“狗獾”打招呼，说：“有点小事情，来晚啦。”③这时，等待已久的冬瓜脸君一副可怜的样子走了进来。他毕恭毕敬地向狐狸行了个礼说：“因为有点事迟到了。”	A-36	C	A-1	坊ちゃん
	読み通した事は事実だが、読む方に骨が折れて、意味が繋がらないから、又頭から読み直してみた。		①读是读了，不过注意力全费在认字上了，意思都不甚明白，只好从头又读了一遍。②读是读了，但由于读起来非常费劲，意思连贯不起来，所以又从头读了起来。③看完全是看完了，可劲都费在认字上，意思仍连贯不起来，只得又从头看一遍。	B-9	A-18	B-8	坊ちゃん
	部屋のなかは少し暗くなって、前の時より見にくく、なったから、とうとう椽鼻へ出て腰をかけながら鄭寧に拜見した。		①屋内渐暗了，比刚才更难辨认，我又来到廊下坐着，郑重其事地拜读了。②房间里稍微有点暗了下来，比刚才更难看清，俺终于走到了前廊的边儿上，坐在那里仔细地拜读起来。③屋子里暗下来了，比刚才看时更加费劲了，只好走到廊檐前坐下，认真地读起来。	C	C	B-9	坊ちゃん
	尤も田舎者はけちだから、たった二銭の出入でも頗る苦になると見えて、大抵は下等へ乗る。		①不过，乡下人小气，这两分钱也看得很重，多半都乘普通的。②不过，看起来，这些乡巴佬都是些小气鬼，只差这两分钱也当成一回事，一般都坐普通席。③乡下人很小器，就那么二分钱，也看得很重，一般都坐二等车厢。	C	C	C	坊ちゃん
	段々歩行いて行くと、おれの方が早速だと見えて、二つの影法師が、次第に大きくなる。		①走着走着，我发现自己的脚步比他们来得快，那两个人影渐渐增大。②俺逐渐行去，看起来俺的脚步相当快，那两个黑影越来越大了。③我不断朝前走去，看来我走得快，两个人影越来越大。	C	C	C	坊ちゃん
	おれの足音を聞きつけて、十間位の距離に逼った時、男が忽ち振り向いた。		①等到只相隔两三丈远时，听到我的脚步声，那男的蓦地一回头。②当距离拉近到二十米左右的间隔时，他们听到俺的脚步声，那个男的忽然回过头来。③当相距大约五、六丈远的时候，男的听到我的脚步声，很快回过头来看了一下。	C	C	C	坊ちゃん
	実はあの会議が済んだあとで、よっぽど仲直りをしようかと思って、一こと二こと話しかけてみたが、		①自从那次会议之后，我确实想同他言归于好，我试着主动搭讪了几句。②老实说，那次会开完后，俺真想和他言归于好，曾经向他打过一两句招呼。③实际上，打那次会议之后，我很想同野猪言归于好，也曾主动找他攀谈一两句话。	C	C	C	坊ちゃん
	酔ってるもんだから、便所へ這入るのを忘れて、おれ等を引っ張るのだから。		①大概是因为喝醉了，把上厕所的事忘了，便拉着我们往回走。②不过都醉了，忘了上厕所，只顾扯俺两个人回去。③因为喝醉了，就忘了上厕所，却把我们两个给拖住了。	B-2	C	C	坊ちゃん
	酔っ払いの目の中る所へ用事を拵えて、前の事はすぐ忘れてしまふんだろ。		①据说醉汉看到什么就为眼前的现象所吸引，而把先前的事忘得一干二净。②醉鬼大概是碰上什么就理会什么，把前头要做的事，一下子忘得一干二净。③喝醉了的人，总是眼前看到什么干什么，而把原来要做的事忘得一干二净。	A-57	C	A-57	坊ちゃん

原文		訳文		分類一覧			作品名
会話文	地の文	会話文	地の文				
	生徒があやまったのは心から後悔してあやまったのではない。只校長から、命令されて、形式的に頭を下げたのである。		①学生不是诚心悔过才来赔罪的，而是校长下了命令，不得不在形式上低头罢了。②学生道歉并非出自内心的悔意，只不过是校长的强迫命令，形式上低头认罪而已。③学生认错，并非心有悔悟才认错的，只是因为校长有命令，才在形式上低下头来的。	B-18	A-72	A-73	坊ちゃん
	おれは喧嘩は好きな方だから、衝突と聞いて、面白半分に駆け出して行った。(?)		①我是喜欢吵架的一个，一听到发生了冲突，高兴地跑过去了。②俺因为是喜爱打架的，一听说吵了架，也一半是为了瞧热闹，便向前跑去。③我喜欢吵架，一听说发生了冲突，怀着一半好奇的心理跑了过去。(?)	C	C	C	坊ちゃん
	山嵐の鼻にいたっては、紫色に膨張して、堀ったら中から膿が出そうに見える。		①豪猪的鼻子青紫，肿胀，好象一碰就要流出脓来。②说到“豪猪”的鼻子，都肿成了紫茄子色。看来，如果把它捅破，很可能从里边流出脓来。③他的鼻子肿得很大，变成了紫色，好象一碰就会流出脓来。	C	C	C	坊ちゃん
	校長と教頭はそうだろう、新聞屋が学校に恨を抱いて、あんな記事をとことらに掲げたんだろうと論断した。		①校长和教务主任说：“是的，报馆恨学校，所以故意登载这种新闻。”②校长和教务主任下结论说：“果然不出所料，报馆的人，对学校抱有积怨，才故意刊登那种消息的。”③校长和教务主任肯定地说：“报馆对学校抱有怨恨，所以才特意登出这种消息来的。”	A-36	B-6	A-36	坊ちゃん
	狸は大方腹鼓を叩き過ぎて、胃の位置が顛倒したんだ。		①狐狸大概肚子发涨了，连肠胃都弄颠倒了。②狗獾大概是敲他那大肚皮敲过火啦，把内脏的位置都弄颠倒了。③也许是狐狸敲打肚子把胃的位置敲颠倒了！	B-17	C	C	坊ちゃん
	この顔色を見たら、おれも急にうれしくなって、何も聞かない先から、愉快々々と云った。		①眼下看到他的表情，我也顿时快活起来，还没问清情况，就连声说道：“真高兴，真高兴啊！”②可看到现在他的这个模样，俺也一下子高兴起来，还没有来得及向他打听个究竟，就连声说：“好啦好啦！”③今天一看他这副表情，也马上高兴起来，先不及问，就说：“痛快，痛快！”	C	C	C	坊ちゃん
	山嵐もおれも疲れて、ぐうぐう寐込んで眼が覚めたら、午後二時であった。		①豪猪和我也都很疲倦，呼呼睡了一觉，醒来一看，已是下午两点。②“豪猪”和俺都困倦得很，呼呼睡了一大觉。醒来的时候，已是午后两点。③野猪和我也都很疲劳，“呼呼”地睡熟了。等醒过来时，已经是下午两点了。	C	C	C	坊ちゃん
	部落の家々は、それぞれ藁ぶき屋根の母屋と杉皮ぶきの石置き屋根の小舎をもって細長く溪谷に延びていたが、家々は竹藪にかこまれていた。マダケ、ハチク、モウソウダケ、メダケ、ハコネダケ、イヨダケなどの繁茂した幾区劃もの藪が、約百メートルほどの距離をおいて、家々をとりまいていて、どの家も藪の中にひっそりと隠れてみえた。		这家家家户户就沿着溪谷一字儿地伸展开去，然而每户人家又被竹丛所包围。繁密的竹丛按各自的种类形成好几个块，有苦竹、淡竹、孟宗竹、山竹、箱根竹、伊予竹等等。竹丛围绕房屋而生，从与从之间的距离约有一百米，看上去，每户人家都仿佛静静地隐藏在竹丛之中。	C			越前竹人形
	もともと、喜左衛門も、竹細工をはじめたのは、軀が小さくて、腕力がなかったためである。		喜左卫门之所以会搞起竹工艺来，本来是因为自己身材矮小、两臂无力的缘故，	C			越前竹人形
	喜助は、この女が父に世話になったときいて、はっとした。 喜助は、遠い雪道を歩いて、わざわざ墓参に来てくれたのだと思うと、茶なりと出さねばなるまいと思って、この女を母屋に案内した。		听女子说到父亲曾照应过她，喜助惊呆了。 喜助想到女子不辞劳苦，走这么长的雪路，特意前来自上坟吊唁，觉得应该沏茶才对，便引女子到正屋落座。	C			越前竹人形
	みんな鬻を結っていた。みんな白粉をぬり、口紅もくっきりとひいていて、廊下を通ると、女のむせるような匂いが鼻をついた。		她们都梳有挽髻，都擦香粉，口红涂得红艳艳的，从走廊上走过时，女人身上强烈的脂粉气冲着鼻子而来。	C			越前竹人形
	平常から軀のよわいたちで、喜助を生んでからはとくに産後のひだちがわるく、乳も出なくて、喜助はおもゆで育ったと父から聞いていたが		喜助听父亲说过，母亲的体质向来虚弱，生下喜助之后，特别是产后迟迟不得复元，乳汁也没有，喜助是靠米汤长大的。	C			越前竹人形
	女たちは、喜助が背がひくくて、テーブルに坐っても、テーブルの高さが喜助の咽喉につかえそうなのをみて、ちょっと異様な眼をしてささやきあっていたが、		由于身材矮小，坐到桌边，桌面顶着他的喉咙。女子们看到这番情形，露出有点异样的眼神，在互相窃窃私语。	A-15			越前竹人形
	喜助は、人形のどの部分にも父の精魂がこめられているような気がして、胸がつまった。		喜助觉得，竹偶的任何一部分都浸透着父亲的精魂，这使喜助感到激动不已。	B-5			越前竹人形
	鯨島は喜助が了承してくれたことに感激して、頭を下げた。		鯨岛对喜助的允诺表示感谢，低头鞠了一躬。	C			越前竹人形
	白い肌が、青みどりの竹の林を背景にして、ぬけ出てきたようにみえる。		玉枝的白皙皮肤在青翠的竹林衬托下，十分显眼。	C			越前竹人形
	忠平にたのみこめば、大旦那にきこえる手前もあって、どこか産婦人科の医者を世話してくれるかもしれない。		玉枝想，去恳求忠平的话，他有鉴于在大老板面前的名声，也许会替我在什么地方找一个妇产科医生的。	C			越前竹人形

原文		訳文		分類一覧		作品名
会話文	地の文	会話文	地の文			
	村の職人は十月に入って十六人になっていて、せまい作業場は、筵を隅々にまで敷きつめて一杯になった。		从十月份开始，村里的工匠发展到了十六人，狭小的作业场已经挤不下了，连角落里都铺上了席子。	C		越前竹人形
	いや、庭樹の繁り、雨の点滴、花の開落などという自然の状態さえ、平凡なる生活をして更に平凡ならしめるような気がして、身を置くに処は無いほど淋しかった。		甚至连庭院里茂盛的树木以及雨点、花开、花落等自然现象，都使他本来平凡的生活显得更加平凡，以至孤寂得没有安身之地，	A-40		布団
	あくる日は日曜日の雨、裏の森にざんざん降って、時雄のためには一倍に怪しい。		第二天是星期天，雨后林子里，雨点哗哗作响，更增添了时雄的孤寂感。	C		布団
	一本、二本と徳利の数は重って、時雄は時の間に泥の如く酔った。		一瓶、两瓶，随着酒瓶数量的增加，他酩酊大醉了，	C		布団
非常に先生の御情に感激しまして、感謝の涙に暮れました次第で御座います。		对老师的情意，他十分感激，以至流出了泪水。		A-40		布団
	熱い主観の情と冷めたい客観の批判とが絡み合せた糸のように固く結び着けられて、一種異様の心の状態を呈した。		主观上灼热的情感和客观上严峻的批判，象搓在一起的线，紧紧地拧在一起，呈现出一种异样的心理状态。	C		布団
	その色、その状、その姿がいかにも怪しい。その怪しさがその身の今の怪しさによく適っていると時雄は思っ、また堪え難い哀愁がその胸に漲り渡った。		那色彩，那形态，那姿态，显得多么凄凉！时雄认为那种凄凉和眼下自身的凄凉十分相似，心中不禁充满了难以忍受的哀愁。	C		布団
	すぐ家に入ろうとしたが、まだ当人が帰っておらぬの上でも為方が無いと思っ、その前を真直に通り返した。		他正要进去，又想本人既然没有回来，进去也没有用。于是，他从门前径直走了过去。	A-38		布団
	芳子が低頭勝に悄然として後について来るのを見ると、何となく可哀そうになっ、胸に苛々する思を畳みながら、黙して歩いた。		可是，芳子低着头，无精打采地跟在后面，见此情景，又觉得有些可怜，只好带着焦急不安的思绪，默默地往前走。	B-9		布団
	時雄は芳子を全く占領して、とにかく安心もし満足もした。		时雄就这样完全占据了芳子，总算放心了，也满足了。	C		布団
	雨の森、闇の森、月の森に向って、芳子はさきまにその事思っ。京都の夜汽車、嵯峨の月、膳所に遊んだ時には湖水に夕日が美しく射渡って、旅館の庭に、萩が絵のように映れれていた。		面对雨天的树林，漆黑的树林，月夜的树林，芳子浮想联翩，想起了京都夜晚的火车，嵯峨的月夜，在膳所游玩时那夕阳光洒满湖面的美景，旅馆的庭院里那宛如图画般盛开的胡枝子花。	C		布団
	こうした恋の為め、煩悶もし、懊悩もしているかと思っ、憐憫の情も起らぬではなかった。		想到他也许正在为这次恋爱而烦恼和懊丧，从而不禁产生出怜悯之情。	A-70		布団
	何だか馬鹿らしいような気がした。愚なる行為をしたように感じられて、自らその身を嘲笑した。		不知为什么，时雄感到很无聊，象干了一件蠢事似的，不禁在嘲笑自己。	C		布団
	今は五日の夜であった。茫とした空に月が暈を帯びて、その光が川の中央にきらきらと金を砕いていた。		初五的夜晚，一轮带着晕圈的月亮挂在茫茫苍穹，河中映现出金色的鳞光。	C		布団
	三日程前から風邪を引いて、熱が少しあった。頭痛がすると言っていた。		当天，芳子到医生那里看病去了。她说大约在三天前感冒了，还有些发烧，头痛。	C		布団
	どうも少し固くなり過ぎて、芳子を自分の自由にする或る権利を持っているという風に見えていた。		显然，他的态度不是服从，而是反抗，而且显得有些强硬，好象他有权利和自由把芳子据为己有似的。	C		布団
	こう思うと、今まで上天の境に置いた美しい芳子は、売女か何ぞのように思われて、その体は愚か、美しい態度も表情も卑しむ気になった。		他这么一想，就觉得以往象仙女一样美丽的芳子，一下子变成了妓女一类的人。不用说她的肉体，连她那优美的姿态和表情都使人感到很卑贱。	C		布団
	そんな手紙を書いたって駄目だと宣告しようと思っ、足音高く二階に上った。		他想告诉芳子，即使写信也不管用，就咚咚地爬上楼去。	B-1		布団
	霊肉共に許した恋人の例として、いかようににしても離れまいとするのである。		灵魂和肉体都已相许的恋人，按理说怎么也是不该分离的。	C		布団
	混雑また混雑、群集また群集、行く人送る人の心は皆空になっ、天井に響く物音が更に旅客の胸に反響した。		混乱接着混乱，人群连着人群，走的人和送的人心里都很空虚。楼板上脚步声，在旅客心里更引起了反响。	C		布団
	子供を持ってあまして喧しく叱る細君の声が耳について、不愉快な感を時雄に与えた。		妻子拿孩子没有办法，正在责骂孩子，那烦人的声音传到时雄耳朵里，他感到很不愉快。	C		布団
	大抵は頭に護謨製の頭巾を被って、海老茶や紺や藍の色を波間に浮かしていた。		①人们头上几乎全包着橡胶头巾，海面上浮动着一片猩红色、绛色和蓝色。②一般都是头上戴着一条橡胶制的头巾，颜色有酱色的，有深青色的，有天蓝色的，漂浮在波浪中间。	C	C	こころ
	先生は白緋の上へ兵児帯を締めてから、眼鏡の失くなったのに気が付いたと見えて、急にそこいらを探し始めた。		①先生系好白地蓝花衣服上的腰带之后，大概发现眼镜丢了，便在近边找起来。②先生穿上提花布的浴衣，束好腰带后，才露出发觉眼镜已经丢失的神情。慌忙向附近地面上找寻。	B-2	C	こころ
「私はあなたに話す事の出来ないある理由があっ、他と一所にあすこへ墓参りには行きたくないのです。．．．」		①“我有不能对你说出原因，我不想跟外人一起去那儿扫墓。②“我有一个不能告诉你的理由，所以不愿意和别人一起到那边去上坟。		C	A-36	こころ

原文		訳文		分類一覧		作品名
会話文	地の文	会話文	地の文			
それから、ある特別の事情があって、 猶更あなたに満足を与えられないで いるのです。		①况且有些特别原因，更不能使你满 意。②还有一个特殊的原因，尤其不能 使你满足。		C	C	こころ
御退屈だろうと思って、御茶を入れて 持って来たんですが、		①我以为你会发闷的，就送了碗茶来。 ②我怕你无聊，替你沏了茶来，		B-1	C	こころ
	下女だけは仮寐でもしていたと見え て、ついに出て来なかった。		①只有女佣人象是还在午睡，最后也没 露面。②有那个女佣，大概是在打瞌睡 吧，竟没有出来。	C	C	こころ
	私は奥さんの態度の急に舞やいて来た のを見て、寧ろ安心した。		①我看到夫人的神色忽然这样兴奋， 倒索性放心了，②我看到太太的态度突然 明朗起来，倒是为她放下了心。	B-19	B-20	こころ
	子供の無い奥さんは、そういう世話を 焼くのが却って退屈過ぎになって、結 句身体の業だ位の事を云っていた。		①夫人没有小孩，她常说帮我做点活儿 倒挺解闷，象是一副调理身体的良药。 ②太太没有小孩，她说，她这样照料着 我，反而可以解解闷，对身体还有益 处。	C	C	こころ
	家内のものは軽症の脳溢血と思ひ違え て、すぐその手当をした。		①家里人误以为是轻微的脑溢血，马上 进行抢救。②家里人误以为是轻度的 中风，立刻替他作了中风的急救治疗。	C	C	こころ
	その時は万一を気遣って、私が引き添 うように傍に付いていた。		①那时我怕万一出事，紧跟在他身旁。 ②那时，为防发生万一，我紧贴在他的 身边。	C	C	こころ
	町は寒風の吹くに任せて、何処を見 てもこれという程の正月めいた景気は なかった。		①街道任凭寒风吹拂，到处不见一点儿 过年的景象了。②街上尽刻着凛冽的寒 风。走到哪儿也瞧不到什么象个新年的 景象。	C	C	こころ
	私は寧ろ先生の態度に畏縮して、先へ 進む気が起らなかったのである。		①显然我对先生的态度有点害怕，也不 敢再往下说了。②因为先生的态度使我 有些畏缩，我不敢再谈下去了。	C	A-1	こころ
御母さんも始めのうちは心配して、な るべく動かさないようにと思ってた がね。		①娘也挺担心的，想尽量不叫他活动。 ②起初我也很担心，打算尽可能不让他 多动。		C	C	こころ
「あの時は愈頭が変になったのかと 思って、ひやりとした」		①“那时我真以为他大脑错乱了，吓坏 了。”②“那时我怀疑他的神经已经错 乱，不觉倒抽了一口冷气。”		C	C	こころ
それから自分の未来に横わる光明が、 次第に彼の眼を遠退いて行くようにも 思って、いらいらするのです。		①他焦虑不安，仿佛觉得自己未来的光 明，渐渐远离了他。②他还觉得照耀着 自己前途的光明，似乎逐渐从他的视野 里在向远方退去，因而焦躁不安。		C	C	こころ
	私も却ってそれを満足に思って、のっ そり引き移って来たKを、知らん顔で 迎えました。		①我倒觉得很满意，若无其事地终于把 K接来了。②我也对这样感到满意，装 作什么都不知道，迎接了慢条斯理地搬 进来的K。	C	C	こころ
	ある日私は神田に用があつて、帰りが 何時もよりずっと後れました。		①有一天，我去神田办事，回来比平时 晚了许多。②有一天，我在神田有些事 情，回家比平常迟得多。	C	C	こころ
それから海へ入ると、波に押し倒され て、すぐ手だの足だのを擦り剥くので す。		①而且一下海就会被波浪冲倒，马上蹭 破手脚。②其次，下海给波浪冲倒了， 手上脚上立刻就会擦伤。		C	C	こころ
拳のような大きな石が打ち寄せる波に 揉まれて、始終ごろごろしているの です。		①拳头大的石块给涌来的海浪冲来冲 去，简直是乱石滩。②打过来的浪头 里杂着拳头那么大的石块，骨碌骨碌滚 个不停。		C	C	こころ
私は暑くて草臥れて、それどころでは ありませんでしたから、		①我连热带累哪还有心听他讲这些事， ②我又热又乏，不是谈论这一套的时 候。		C	C	こころ
私も冷たい手を早く赤い炭の上に翳そ うと思って、急いで自分の室の仕切を 開けました。		①我也想赶快在红炭上烤烤冰凉的手， 便急忙打开自己房间的隔扇门。②我也 想把冰冷的手赶快在烧红的炭火上烤 烤，急急忙忙拉开自己房间的隔扇。		C	C	こころ
道幅も狭くて、ああ真直ではなかつた のです。		①狭窄的小路也没有那么直。②路面也 狭，不那么笔直。		C	C	こころ
	それで無理に機会を拵えて、わざとら しく話を持ち出すよりは、自然の与え てくれるものを取り逃さないようにす る方が好かろうと思って、例の問題に はしばらく手を着けずにとそとして置 く事にしました。		①于是我又盘算开来，与其勉强制造机 会，好象是我故意挑起的话头，倒不如 抓住赋与我的自然的机会更好些，就 决定先把这个问题的悄悄放下来。②于 是我又盘算开来，与其勉强制造机会， 好象是我故意挑起的话头，倒不如抓住 赋与我的自然的机会更好些，就决定先 把这个问题的悄悄放下来。	B-1	C	こころ
	私はその時さぞKが軽蔑している事だ らうと思って、一人で顔を赧らまし た。		①那时，我想K一定要看不起我了，便 独自羞红了脸。②我在那时揣想着K一 定会瞧不起我吧，不禁自个儿面红耳 赤。	C	C	こころ
	その時Kの洋燈に油が尽きたと見え て、室の中は殆んど真暗でした。		①那时K灯盏里的油似乎已经燃尽了， 室内几乎一团漆黑。②那时K的煤油灯 里好象油已经用尽，房间里几乎漆黑一 片。	C	C	こころ
	橋から川上の方は黒煙に覆われて、火 焰が至るところに見えながらも市役所 附近はどうなっているのかわからな い。		桥和河都被黑烟笼罩着，到处都可以看 到火焰，不知道市政府附近怎么样了。	C		黒い雨(黒 雨)
	僕はその子に情が移ると困ると思っ て、名前も何も聞かないことにした。		我想：如果去怜悯这个孩子，那就会惹 上麻烦，所以决定连名字什么的都不打 听。	A-36		黒い雨(黒 雨)
	霜が降りて銀杏の葉が散るころには、 好太郎さんのうちの屋根は落葉でいち めん覆われて、黄色い屋根になって いた。		霜降以后，银杏树开始落叶时，好太郎 家的房顶全被落叶覆盖，变成黄颜色的 屋顶。	C		黒い雨(黒 雨)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	人通りは、僕ら二人のほかには一人もなく、物音のしないなかに瓦を踏み割る音が異様に大きく響く。		行人除了我们两个之外，没有其他人了。在这一片寂静之中，踩破砖瓦的声音就显得更响了。	C	黒い雨(黒雨)
	「庭の松の木の前が、燃えかけていますが、高く、どうすることも出来ませんでした」	“院子里的松树顶上，烧起来了，但很高，毫无办法。”		C	黒い雨(黒雨)
	耳のところに血のかたまりが大きく出来て、耳か血のかたまりか見分けがつかねた。		耳朵上有个大血块，很难分清是耳朵还是血块。	C	黒い雨(黒雨)
	広島市街の様子についても部分的にしか説明のしようがなくて、全貌について説明することが出来なかった。		広島街上的情况，我也只能说出一部分，整个的情况，我说不出来。	C	黒い雨(黒雨)
	ずっと遠くまで見通せたかと思うと、たちまち僕らも煙に包まれて、目も口もタオルで塞がなくてはいけなくなる。		正要再往远处看，忽然烟雾把我们包围住了，只好用毛巾捂住眼睛和嘴。	B-9	黒い雨(黒雨)
	風が次第に落ちて来て、煙が動かなくなったので、だんだんに息苦しくなってきた。		风渐渐小了，烟雾不动了，而我却慢慢地喘不上气来了。	C	黒い雨(黒雨)
	火焰の大竜巻に吸いあげられて、きりきり舞いたから団子のように丸まったらしい。		因为滴滴乱转了一阵，所以圆得象团子一样了。	A-7	黒い雨(黒雨)
	右手の堤防下の草むらに無数の死体が転がっていた。川のなかにも、次から次に流れていた。岸の川端柳の根にかかったのが流れに押され、ぐるりと一廻りして、むっくり顔をあげるもの、水に揺さぶられ、あるいは上半身を、あるいは下半身を、ふんわりと水面に現すもの、川端柳の下でぐるりと廻り、枝につかまるとするかのようには両手を上げて、生きているのではないかと思われるものがあった。		左边堤坝下面的草丛里躺着无数的尸体，河里的尸体也是一个接着一个地往前流。如果被岸边的柳树根挡住流不动时，有的就会骨碌一转，露出胖乎乎的脑来；有的被水一冲，不是上半身，就是下半身会慢慢地露出水面来。有的在河边的柳树下打转，伸着双手，好象想抓住树枝似的，使人感到他不是还活着。	B-5	黒い雨(黒雨)
	風に煽られて、川向う一面に灼熱色の火焰が天に舞いあがっていた。		风一吹，河对岸一片红通通的火焰升向天空，	C	黒い雨(黒雨)
	「そうでしたか。押ししたりして、申し訳ないことをしました」	“挤着您了，实在对不起。”		C	黒い雨(黒雨)
	焼けた睫毛ごとかたまりの黒い団子状になって、さながら黒い毛糸が焼けて出来たかたまりのようである。		烧掉的睫毛成了一块黑团子，就象黑毛线烧成了一个疙瘩一样。	B-1	黒い雨(黒雨)
	あまりのことにうつけのようになって、ただ現状を現状のまま受取るよりほかはなかった。		那真是令人目瞪口呆，惨不忍睹，所以只好就现场看看现场。。	A-36	黒い雨(黒雨)
	山本駅で駅から外へ出る者は一人もなく、みんな線路づたいに広島の方へ一列になって歩いて行った。		在山本车站，没有一个人出站，大家排成一行，沿着铁路线向広島方向走去。	C	黒い雨(黒雨)
	やれやれと思って、僕は背中の荷物を石の欄干に凭せかけて一と休みした。		实在是累得不行了，我便把背上的背囊，靠在桥的石头栏杆上，休息了一下。	B-2	黒い雨(黒雨)
	糧食は市役所が心配してくれて、大きな握飯を一日に一つと、副食物は梅干か沢庵の接待を受けていられるそうだ。		粮食由市政府解决，每天免费配给一个大饭团子，还配给一些梅子干、咸菜之类的副食品。	C	黒い雨(黒雨)
	これで広い範囲でもって、がくんがくんを受けとめるので少し具合がよくなった。		由于在很宽的范围內承受拉绳力量，情况就稍有好转了。	A-15	黒い雨(黒雨)
	僕らの安否を気づかって、山奥の村からわざわざやって来たものである。		因为他们很关心我们的安全情况，所以才特意从深山坳的村庄里来看望我们。	A-7	黒い雨(黒雨)
	水稻栽培で深水にして育てると、水面に接するところの茎の細胞が徒長的に肥大して、茎の構成に弱体化を招いて倒伏の原因をつくる。		种水稻，如在深水中有育苗，接触水面部位的茎细胞会徒然肥大，从而使稻茎的构成变得很脆弱，这是造成倒伏的原因。	A-70	黒い雨(黒雨)
	重油代りにするらしい松根油の製産が間に合わなくて、せつかく戦闘力を持ちながら碇泊したきりになっていたそうだ。		听说，代替柴油的松根油还没制造出来，为了保存战斗力，军舰就不得不抛锚停泊。	C	黒い雨(黒雨)
	水害のため福塩線の上下駅から乗車できなくて、三次町まで歩いて行って一泊した。		可是由于水灾，不能在盐福铁路线的上下町车站乘车，所以走到三次町住了一夜。	A-36	黒い雨(黒雨)
	先方から話を断わってくる前だから、ちようど婚約がまとまりかけて、嬉しさ恥ずかしさで血の道が起ったようになっていたことでもあり、		因为对方还没有表示拒绝，婚事还有一线希望，她又喜又羞，结果得了妇女病。	C	黒い雨(黒雨)
	人に伝染すると思って、遠慮したんだろう」	可能是怕传染给别人，所以才回避的吧。”		A-36	黒い雨(黒雨)
	こりゃ原爆病や、しまったと思って、アロエの葉を三枚も四枚も食べたんだよ。	她想这是原子病，这回可完了，吃了三、四片芦荟叶。		C	黒い雨(黒雨)
	重松は病人に窮屈な思いをさせてはいけなくて、なるべく病室へ顔を出さないようにすることにした。		重松想不能让病人感到不开心，所以决定尽可能不到病房去。	A-36	黒い雨(黒雨)
	身は骨と皮ばかりに瘦せて、蒲団を三枚も四枚も敷いて寝ていても、畳の固さが骨にこたえて痛くてならなかったそうなの。	据说身体瘦得只剩下皮包骨，睡觉时铺上三、四床被子还感到床很硬，骨头痛得受不了，		C	黒い雨(黒雨)
	水を飲んではいけなくて禁じられていたが、遂に堪えられなくなって、片眼を指で開きながら、こっそり掘抜井戸まで辿りついて飲んだ。		尽管禁止喝水，但因为实在受不了，于是用手指扒开眼皮，偷偷地来到开挖出来的井边喝了水。	A-61	黒い雨(黒雨)

原文		訳文		分類一覧		作品名
会話文	地の文	会話文	地の文			
	八月九日の朝は夜来の高熱も幾らか下火になって、意識恢復の徴候を自覚した。		八月九日早晨，夜来的高热多少退了一些，自己觉得有恢复意识的征兆。	C		黒い雨(黒雨)
	私はどこか探してみたいと思って、その近くの川に沿って川上に向けて行きました。		这一来，我反而想找找看。于是，沿着附近的河向上游走去。	A-38		黒い雨(黒雨)
	でも、取りのぼせてしまっていて、ただ一箇所、戸坂というところだけ耳に残りました。		可是，我急糊涂了，耳朵里只剩下户坂这么一处。	C		黒い雨(黒雨)
	とにかく戸坂を探したら、後はまた何か噂を聞いて次を探して歩こうと思って、戸坂しか覚えませんでした。		就先去户坂找找再说，听听有什么消息之后，再下去寻找。所以只记得户坂。	A-36		黒い雨(黒雨)
	でも、弱々しく手を挙げるのが見えまして、やっと主人だということが分かりました。		可是，看见有人没有劲似地举起了手，这才知道那就是我丈夫。	B-15		黒い雨(黒雨)
	ちゃんとした栄養は受附けないし、ですからその補給が出来なくて、さながら癌の患者みたいな状態です。		由于很好的营养不能吸收，身体得不到补充，这跟癌症病人是一样的情况。	C		黒い雨(黒雨)
	主人の場合は膀胱の内側の粘膜がすっかり剥けて、その粘膜が尿道かどこかに詰まって、おしっこが出なくなりました。		从丈夫的情况来说，连膀胱内部的粘膜都被剥离开来，那种粘膜堵塞在尿道或是别的什么地方，使尿排不出来。	B-5		黒い雨(黒雨)
	血液の循環が悪くなって、そういう現象を余計に醸成せしめたということもあるだろう。		也可能因为血液循环不畅通，才更加酿成这样现象的。	A-2		黒い雨(黒雨)
	浅二郎さんは原爆病が目に出るのを警戒して、黄色い眼鏡をかけていた。		浅二郎很警惕眼睛生原子病，所以戴上了黄色眼镜。	A-36		黒い雨(黒雨)
	焼跡に入ると路上の硝子の破片に太陽が反射して、まともに顔をあげて歩くことが出来ないほどであった。		路上玻璃碎片反射出的阳光，实在使我无法抬起头来走路。	B-5		黒い雨(黒雨)
	用水の溝川も干あがって、底の泥土の窪みに折り重なっている鱧が殆どもう骨だけになっていた。		水渠也干涸了，沟底的泥都开了圪，泥鳅几乎只剩下些骨头。	C		黒い雨(黒雨)
	今年の春、一車輛ぶんの石炭が誤って他の会社へ運ばれて、我々の会社が石炭を横に流したと疑われたことである。		那是今年春天，错把一个车皮的煤运到别的公司去了，结果怀疑我们公司用煤搞邪门歪道。	C		黒い雨(黒雨)
	私は孤独な歩行者として遠んだコースの偶然によって、順々に見たにすぎない。		作为一名孤独的步行者，我选择了这条线路，不过是由于这种偶然，我才依次地见到了这些景象。	A-74		野火(野火)
	俺のも頼むという声が掛って、到頭私は数本の水筒を持たされてしまった。		有人说让我帮他打水来，于是我不得不拿上好几个水壶。	A-38		野火(野火)
	片側の斜面が尽きて横谷が現われ、流れ出る水が落ち合って、河原を拡げていた。		山脊的斜坡的尽头，是一条横谷，流水汇集在这里，扩展成一片沙滩。	C		野火(野火)
	窓の外に静かな海があり、既に高く昇った日に照らされて、岬は蔭を失っていた。		窗外是平静的大海，在高高地挂在空中的阳光的照射下，海角的阴影已经不见了。	C		野火(野火)
	手許が狂って、うまくはまらなかった。		可手却不听使唤，怎么也压不上子弹。	C		野火(野火)
	濡れた靴と地下足袋はどンドン破れて、道端に脱ぎ棄てられた。		湿了的军靴和胶底袜都破烂不堪，被脱下来丢在路旁。	C		野火(野火)
	見凝めればなお、光り輝いて、周辺の草の緑は遠のき、霞んで行くようであった。		凝视使得它更加光辉夺目，周围的青草似乎都已经黯然失色，退避三舍。	C		野火(野火)
	遂に或る日が晴れて、永松は出掛けた行った。		终于有一天天晴了，永松又外出了。	C		野火(野火)
	陽にあぶられ、雨に浸されて、思う存分に変形した、それら物体の累積を、叙述する筆を私は持たない。		在阳光暴晒下，雨水的浸泡下，变成了各种各样的形状，我无力对那些堆积的物体作一番描述。	C		野火(野火)
ただ俺をこき使おうと思って、そら使ってやがるんだ]		他就是为了逼我干活，才装病的。”		B-6		野火(野火)
	追想も一つの体験であって、私が生きていないと誰がいえる。		回忆也是一种体验，谁能说我已经死了?	C		野火(野火)
	丘の頂上の草は、水の流りに押されて、靡いていた。(描写)		山丘上的草被流水冲刷，倒伏着。	C		野火(野火)
	夜がふけて、街の灯の色に一日の疲れが見えた。		夜深了，街灯暗淡无光，现出了它一天的疲劳。	C		青春の踉蹌(青春的踉蹌)
	その向いの河田は三年ほど前に火事で焼けて、前よりも大きな家を建てた。		松木门的河田家，三年前遭到火灾，如今又盖了新屋，比以前还要大。	C		青春の踉蹌(青春的踉蹌)
	亡くなった賢一郎の父も、あんな風な女に迷って、一度失敗したことがあった。		贤一郎的已经去世的父亲也被那样的女人迷住过，曾经一度失足。	C		青春の踉蹌(青春的踉蹌)
でもあなたと御一緒だと、何もかもおいしくって、思わず涙山食べしてしまうんです。		可是不知怎么和你在一起感到什么食品都好吃，不知不觉就吃了那么多。		B-1		青春の踉蹌(青春的踉蹌)
	そのはなしにそそのかされて、登美子はひとりで見に行った。		登美子听了别人的唆使，独自去看了那部电影。	C		青春の踉蹌(青春的踉蹌)
	商店街は赤と白の幕を軒のあたりに引きまわし、福引券付大売出しをやっている、賑やかだった。		商店街上，红色和白色的广告幕布在屋檐上飘飘去，到处喊大减价、大拍卖，十分热闹。	C		青春の踉蹌(青春的踉蹌)

原文		訳文		分類一覧		作品名
会話文	地の文	会話文	地の文			
	彼女は父と母との関係には何の疑いをも感じなかったのに、父と栄子との関係にはまなましい性を感じて、からだが震えた。		她对父亲和母亲的关系从未有过任何怀疑，可是对父亲和荣子的关系却感到是赤裸裸的性的关系，一想到这一点她就浑身发抖。	C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	向いあって立つと、男の方がずっと丈が高く、男の圧力のようなものが感じられた。		她和他面对面站着，男方的个儿高出她许多，她直感到男人的压力。	C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	雪の粒は大きくて、激流の泡の中に巻きこまれたようだった。		雪花又粗又大，人好象要被激流卷走似的。	C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	どこまでもついて来る登美子が、暗黙のうちに彼の責任を追求して来るように思われて、憂鬱だった。		可是一直跟在他后面的登美子似乎暗暗地向他追究责任。因而使他感到忧郁。	A-35		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	リフトを降りると、眺望は大きくて、そこだけ日の当たっている遠い山脈が、白く光って見えた。(描写)		走出电梯，他顿时觉得视野开阔了。太阳照在远处的山脉上，闪烁着白光。	C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	死は、あまりに遠くて、自分には無縁のこのように思われていたが、		死，还远着哩，好象跟自己还没有关系，	C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	試験場は左翼学生に占領されて、先生たちも入ることができなかった。		可是被左派学生占领，老师也没法进入考场。	B-3		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	左翼運動にもそれと似たような、奇怪な魅力があって、あの学生たちに命がけの演技をさせてしまうのではないだろうか。		左翼运动就象当演员一样，具有一种奇怪的魅力，让学生们拼着命去演这出悲剧。	C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	それが登美子にはむずかしくて、よく解らなかった。		而登美子对这理论觉得难以理解；	C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	彼女は矛盾した二つの理論の間に足をからまれて、どう言ってもいか解らなくなっていた。		她被这个矛盾理论纠缠着，不知道该怎么说好。	C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	別れたあと、小野の心のみじめさばかりが印象に残っていて、不愉快だった。		一路上他的脑际充满着小野忍受着心灵创伤的形象，心里感到郁郁不乐。	C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	小野精二郎は若き日の恋愛におぼれて、打算を抛棄した。		小野精二郎年轻时沉溺于恋爱，放弃了算计，	C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	康子の手紙は短くて、愛情らしいものの匂いほどにも無かった。		康子的信很短，几乎毫无爱情的味道。	C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	喫茶室は中庭に面していて、静かだった。		茶室面对着庭园，静极了。	C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	大橋登美子とほとんど同じ年であったか、康子は言葉も感情もませていて、何かしら心に鋭い刺をもっていた。		康子的年龄和大桥登美子相仿，可是她的语言和感情却老成多了，好象心里有刺。	C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	ともかくも映画を見ておこうと考えて、彼はホテルを出た。		别的先不管，看了电影再说，于是他走出了旅馆。	A-38		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	窓の外にはまだ雨が降っていた。その鬱陶しさが、母の言葉のうるささと一箱になって、一層やりきれない気持になった。		窗外仍然下着小雨，梅雨的郁闷加上母亲这番叫人听了不舒服的话，使他难以排解心中的愁闷。	B-5		青春の踉跄 (青春的踉跄)
立派なお父さんを持って、わたし仕合せだわ		我有你这么个好父亲，可真是幸福了……”		C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
だから疎な取入もなく、貧乏暮しだね。		收入微薄，过着穷日子，		C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	一日の行楽に疲れて、眠っている人が多かった。		一天的作乐，人们都累了，很多人在打盹。	C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	急激な変化は悲劇をもたらすかも知れないが、緩慢な変化にはいつの間にか、それに適する心の準備もとのえられて、格別のいざこざもなく別れるに違いない。……		急剧的变化也许会产生悲剧，而缓慢的变化，使她思想上有所准备，就不会引起纠纷。	B-1		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	彼は頭に血がのぼっていて、胃が働いてくれないようだった。		他头脑充血，胃肠的机能迟钝了。	C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
だって熱が高くて、どうしようも無かったの。		我发着高烧，一点办法也没有。		C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	閲覧室のなかに学生の数はすくなく、静かだった。		阅览室里的学生越来越少了。屋子里是静悄悄的。	C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	装飾のある窓の外に立ちならんでいる銀杏の葉が、もうすこしばかり色づいていて、秋の深さが感じられた。		装饰得很华丽的窗外，一排排的银杏树的树叶已快落尽，已是深秋了。	C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	太陽が西の山の肩に沈もうとして、虹色の光の縞が水面に流れていた。		太阳已快下山，彩虹的倒影在湖面漂荡。	C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	夕焼けだけが僅かに西の空に残っていて、空気は冷えてきた。		夕照在西边天空上还残留着，即将褪去。天气很冷。	C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	死んだ女の体は死んだ魚と同じように冷たくなり、やがて腐り、崩れ、流れ、風化して、原素に還り、土に還り、箱根の雪に降り埋められて、春までには跡かたも無いものになってしまう。		这女人的尸体和死了的鱼一样渐渐变冷，不多时就会腐烂，变质，风化，又还原成原素，变成土，埋在箱根的积雪下，到第二年春天已无影无踪。	C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	観光客が居なくなって、町はもうひっそりとしていた。		街上已没有观光游客，四处寂静无声。	C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	やがて車窓の外の灯の数が次第にふえてきて、東京が近くなった。		不多一会儿，车窗外电灯慢慢地多起来，东京已快到了。	C		青春の踉跄 (青春的踉跄)
	帰るみちみち、登美子の首をしめた時の手のひらの感触が思い出されて、苦しんだ。		归途中，他又回忆起勒死登美子时手掌上的感触。他感到很痛苦。	C		青春の踉跄 (青春的踉跄)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	からだの調子はどこかが狂っており、昨夜は火事のためもある、寝つかれずに輾転とした。		他觉得身体有点不舒服，也许昨夜的火灾，使他辗转反侧睡不着。	C	青春の踉蹌 (青春的踉蹌)
	あたりは静かになり、眼の前がまっ暗になって、意識がうすれた。		周围一片沉寂，眼前一团漆黑，他渐渐失去了知觉。	C	青春の踉蹌 (青春的踉蹌)
	あの事件以来の張りつめていた気持が崩れて、もうどうでも良いという気になっていた。		打那事件以来，他一直心情紧张，自己也不知道怎样来控制自己。	C	青春の踉蹌 (青春的踉蹌)
「少しお訊ねしたい事がありまして、今から一緒に来てもらいたいですか……」		“有点事要问你，请你去走一趟。……”		C	青春の踉蹌 (青春的踉蹌)
	写真はきわめて明るく写っていて、女の顔に乱れている雑草の一本一本まではっきりと見えていた。		可是现在这张片却照得很明亮，散乱在女人脸上杂草一根一根都看得很清楚。	C	青春の踉蹌 (青春的踉蹌)
	坐っている板張りの床はつめたくて、体温がだんだん下がって行き、頭がしびれてくるのが解るようだった		他坐在地板上，体温正慢慢下降，头脑已麻木不仁了。他很想知道自己现在是个什么样子。	C	青春の踉蹌 (青春的踉蹌)
だからさ、お前は登美子が妊娠したんで、その処置に困って、あわてて殺してしまった。……		“因此，当你知道登美子怀孕了，没法处理，便急急忙忙把她杀了。……”		C	青春の踉蹌 (青春的踉蹌)
	しかし相手の顔は逆光線のなかであって、まっ暗だった。		可是对方的脸正处于逆光，一片漆黑，	C	青春の踉蹌 (青春的踉蹌)
	彼女は胎児の始末に困って、それをすべて江藤の責任にしてしまおうと考えたに違いない。		她难以处理胎儿，于是把一切责任都推到江藤身上。	A-38	青春の踉蹌 (青春的踉蹌)
	馬鹿にされたのだと思って、すぐに引返していたかもしれない。		也许还会觉得受人愚弄，立刻掉转身子返回上去呢。	C	砂の女
	ランプの光に気づいて、女が振向いた。		大概注意到了灯光，女人回过头来。	C	砂の女
	おどろいて、とびのきながら、あぶなくランプをとり落しそうになる。		他一惊，急忙闪开，差一点把油灯给弄掉地下。	C	砂の女
	いきなり思いがけない選択をせまられて、ためらった。		可惜，还没等想清楚就要逼着他选择，他踌躇了。	C	砂の女
	あまり、手まわしがよすぎて、見すかされたような感じだった。		他觉得那安排准备也出色过头了，自己象被谁看中了似的。	C	砂の女
	やがて、足の筋肉がひきつって、動けなくなってしまった。		不一会儿，脚上的肌肉全麻木了，再也动弹不得了。	C	砂の女
	ここはもう、砂に侵蝕されて、日常の約束事など通用しなくなった、特別の世界なのかもしれない……		这里也许是受到沙子侵蚀，不通行约定俗成规矩的特殊世界吧……	A-75	砂の女
	すっかり気分を害して、つなぎどころか、口をきく気もなくなってしまう。		那香烟完全破坏了情绪，他休息的时候，再也提不起开口的精神了。	C	砂の女
	砂にうたれて、気を失って以来、ずっと寝たつきりなのだ。		被沙子打倒，昏厥过去以后，他一直就这么躺着。	C	砂の女
	失神から回復したとき、まだ女の家に寝かされたままであることを知って、男はいささか気を悪くした。		神智恢复过来的时候，男人发现自己还睡在女人的家里，心里真有些不痛快。	C	砂の女
	ステテコの紐がくいこんだ、胸のまわりに、砂がたまり、そこだけが赤くかぶれて、むず痒かった。		短裤衩的绳子勒进腰部，腰部周围蓄着沙子，只有这部分红红的，还起了炎症，刺痒痒的。	C	砂の女
	女の受身に気づいて、やっと自制をとりもどす。		男人觉察到了女人的顺从，总算恢复了自制。	C	砂の女
	ふいに体重が消えて、宙に浮んだ……船酔いのような感覚が、すうっと体の中を通りぬけ、それまで手の皮膚をよじってさかっていたロープが、無抵抗に手のなかに残った。		忽然体重消失了，浮在了半空中……晕船般的感受，“喇”地穿过全身，刚才扯着手上皮肤往上拖的绳索，现在毫无抵抗地留在了手里	C	砂の女
	不意の闖入者におどろいて、あばれた。		突然而来的闯入者弄得它狂躁起来。	B-21	砂の女
	地面をゆするような衝撃をうけて、立ちすくむ。		他受到了地面摇撼的冲击，呆立不动。	C	砂の女
	飛砂に研ぎ出されて、屋根は、葺きたてのように白く柱目を浮き立たせていたが、		被飞沙磨光的屋顶，象没有铺东西似地，白白的木纹显露得清清楚楚。	C	砂の女
右の崖は、低すぎて、中からのぞかれるおそれがある……		……右面的坝太低了，恐怕会被坝里的人看见……		C	砂の女
	小屋の入口は、半分以上砂にふさがれていて、ほとんど見透しがきかなかった。		小屋的入口，一半以上被沙子堵住了，看不透里边的情景。	C	砂の女
	おそらく、無意識のうちに明りを求めて、つい高いところに足がむいてしまおうせいなのだろう。		恐怕无意识中一直追求着亮光，所以，才跑到高处来了吧。	A-36	砂の女
	驚いて、抜きとろうと、ふんばった反対側の足が、こんどは膝まで、ずぶずぶともぐってしまった。		他吓了一跳，赶快提腿，谁知另外一条腿挣扎使劲，这回扑哧扑哧竟淹没到了膝盖。	C	砂の女
	男の鼻から、血が吹きだした。血に、砂がこびりついて、男の顔は土くれになった。		男人鼻子里喷出了血，鲜血沾上了沙子，男人的脸成了土疙瘩。	C	砂の女
	すこしおどろいて、つぎの山吹の花枝を折ろうとすると、その枝にも、まきついていた。		我有点惊奇，想折另一棵棠梨花的花枝，可那花枝上也盘绕着蛇。	C	斜陽(斜陽)
	玄関にはいってみると、もう東京からのお荷物がかかっている、玄関からお部屋からお荷物で一ぱいになっていた。		进门一看，从东京寄来的行李都到了，从门口到房间堆满了行李。	C	斜陽(斜陽)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	風呂場で、手と足と顔を洗い、お母さまに逢うのが何だかおっかなくって、お風呂場の三畳間で髪を直したりしてぐずぐずして、それからお勝手に行き、夜のまったく明けはなれるまで、お勝手の食器の用も無い整理などしていた。		我走进浴室，把脸和手脚洗了洗，可是总有点害怕见到母亲，于是在浴旁的三铺席房间里梳头发，磨蹭了半天，然后又到厨房去整理那些用不着整理的碗筷，一直弄到天大亮。	A-38	斜陽(斜陽)
	自分にもよくわかったような気がして、とても、胸がうずくほど、うれしかった。		仿佛也完全能够体会了，心里可真高兴啊。	C	斜陽(斜陽)
	呼吸が稀薄になり、眼のさきもややもやと暗くなって、全身の力が、手の指の先からふっと抜けてしまう心地がして、編物をつづけてゆく事が出来なくなった。		呼吸变得稀薄，眼前发黑，一片模糊，全身的力气忽然从指尖上跑掉，毛线都打不下去了。	C	斜陽(斜陽)
	直治は、薬屋への支払いに困って、しばしば私にお金をねだった。		直治没办法给药房付款时，曾再三死乞白赖地求我给他钱。	C	斜陽(斜陽)
	或る日、私は、夫からおごとをいただいて淋しくなって、ふっとそう言った。		有一天我受到丈夫责备时，不禁觉得孤单凄凉，无意中说了这样一句话。	C	斜陽(斜陽)
	私はあまりおそろしくて、がたがた震えた。		我听了觉得很可怕，浑身嗦嗦发抖。	C	斜陽(斜陽)
	しかし、三十の女のからだには、もう、どこにも、乙女の匂いが無い、というむかし読んだフランスの小説の中の言葉がふっと思い出されて、やりきれない淋しさに襲われ、		一个女人到了三十岁，她身上就不再存在丝毫少女的气息了。我忽然想起从前读过的一本法国小说中的这些话，心头不禁感到一阵难以忍受的孤单和寂寞。	C	斜陽(斜陽)
	うれしくて、うれしくて、すうっとからだに煙になって空に吸われて行くような気持でした。		我高兴得不得了，觉得自己的身子好象一下子轻飘飘的，象烟那样飘到天上去了。	C	斜陽(斜陽)
	「ええ、少し。霧でお耳が濡れて、お耳の裏が冷たい」	“嗯，有一点。耳朵被雾气弄湿了，耳朵后面觉得冷。”		C	斜陽(斜陽)
	あまりうれしくて、ありがたくて、涙ぐんでしまった。		这是多么值得庆幸，多么叫人高兴啊，我情不自禁地热泪盈眶。	C	斜陽(斜陽)
	左の手は、まだそんなに腫れていなかったけれども、とにかく傷ましく、見ている事が出来なくて、私は眼をそらし、床の間の花籠をにらんでいた。		她的左手虽然肿得不太厉害，也还是叫人不忍心看，于是将视线移开，瞪眼望着壁龛上的花篮。	A-38	斜陽(斜陽)
	「毎日いそがしくて、疲れるでしょう。」	“每天这么忙，你不累吗？”		C	斜陽(斜陽)
	心細くて、涙が出そうになった。		我有点泄气和不安，眼泪都快掉下来，	C	斜陽(斜陽)
	チエちゃんは、うろたえて、顔を可憐に赤くさせた。		知惠小姐慌得脸颊绯红。	C	斜陽(斜陽)
	ふと可哀そうになって、放棄した。		忽然觉得他可怜，就不再抗拒了。	B-1	斜陽(斜陽)
	その「洋服」というえさに釣られて、彼女はやっとな納得が行ったのでした。		她受到“洋装”这一诱惑，终于同意了 my 的建议。	C	痴人の愛(痴人之愛)
	こんな筈はないのだがと、思って、一度私はハリソン嬢を訪ねたことがありますが、		我觉得非常奇怪，便拜访了哈里逊小姐。	C	痴人の愛(痴人之愛)
	「何が？……」 ++ 「種」とはどう云う意味なのか、Tの言葉を判じかねて、私は少し狼狽しながら聞き返しました。		“什么？……”从T的话里难以判断这“秘密”意味着什么，我有些狼狽。	C	痴人の愛(痴人之愛)
	笠の蔭から明るい方へはみ出している彼女の手は、甲を下に、掌を上、に、綻びかけた花びらのように柔かに握られて、その手頭には静かな脈の打っているのがハッキリと分りました。		她的手从灯伞背后伸出到亮处，手背朝下，手掌向上，松松地握着，宛若一朵初绽的鲜花，在手腕处，可以清楚地看到脉搏在静静地跳动。	C	痴人の愛(痴人之愛)
	「讓治さんが始めてカフェエへ来た時には、イヤにむつつりと黙り込んで、遠くの方からジロジロ私の顔ばかり見て、気味が悪かった」	“你第一次来咖啡馆时，绷着脸不发声，从远处一个劲儿地盯着我的脸，真可怕。”		C	痴人の愛(痴人之愛)
	自分も卑屈だと思いながら、気が弱くって、ついぐずぐずに奴等と付き合っていたんです。	但由于生性懦弱，最终还是不明不白地和他们来往了。		A-15	痴人の愛(痴人之愛)
	ナオミの居るべきその座敷は、障子が締まって、ガラスの中は薄暗く、ひっそりとして、人気がないように見えるのでした。		这时我发现纳奥米呆的那个房间的纸拉门关着，里面昏昏暗暗、鸦雀无声，看来象没有人。	C	痴人の愛(痴人之愛)
	全体私はシンプル・ライフと云う美名に憧れて、こんな奇妙な、甚だ実用的でない絵かきのアトリエに住んだのですが、	只因我想往“纯朴之爱”这一美名，才住在这个奇妙而极不实用的画室里。		A-33	痴人の愛(痴人之愛)
	今ではボツボツそばかすのような斑点が出来、物によってはすっかり時代がついてしまつて、まるで古めかしい画像のように朦朧としたものもありましたけれど、		现在已稀稀落落出现了雀斑似的斑点。有些相片深深地打上了岁月烙印，变得模模糊糊，简直就象古旧的画像。	C	痴人の愛(痴人之愛)
	それでも何だかこの連中のずべらなのがアテにならないような気がして、なお念のために会社の電話番号を教えたり、この様子では大森の家の番地なんぞも知らないのではないかと、それを委しく書き止めてりして出て来ました。		尽管如此，我总觉得他们稀里糊涂地不可靠，为慎重起见，把公司的电话号码告诉他们。看样子，他们也不知道大森家里的地址，于是将详细地址留下便出来了。	A-38	痴人の愛(痴人之愛)
	ドアを開けると、私は浜田のうしろの方に彼女が寄り添っているかと思つて、辺りをキョロキョロ見廻しましたが、		我以为她会跟在浜田后面，一打开门便瞪着眼睛四下看，	C	痴人の愛(痴人之愛)

原文		訳文		分類一覧			作品名
会話文	地の文	会話文	地の文				
	危篤だと言う電報が来たのは、浜田に会った翌々日の朝のことで、私はそれを会社で受け取ると、すぐその足で上野へ駆けつけ、日の暮れ方に田舎の家へ着きましたが、もうその時は、母は意識を失っていて、私を見ても分らないらしく、それから二三時間の後に息を引き取ってしまいました。		接到病危电报是在与浜田见面的第三天早晨。我在公司里收到这份电报，立即直接赶到上野，日暮时分回到乡下的家中。这时母亲已神智不清，见了我似乎也不认识，过了两三个小时就停止了呼吸。	C			痴人之愛 (痴人之愛)
	彼は仲田と話しても杉子のことに気をとられて、つい仲田の云うことを聞きもらすことさえ多かった。		他和仲田说话时也在惦记着杉子，以至经常听漏了仲田所讲的话。	A-40			友情(友情)
	当然と当然がぶつかって、殺しあうのも当然だ。		当然和当然相冲突、相残杀又是当然的。	C			友情(友情)
	野島はそんなことを云ったが、心はほかにあって、いつものように興奮することは出来なかった。		野島嘴里这样说，心却在别处，因而象往常那样兴奋。	A-35			友情(友情)
	しかし皆がうれしそうにしているのを見ると、彼はもつと居ていい許しを得たように思っ、うれしく感謝した。		但是，看见大家高兴的样子，他好象是得到再待一会儿的允许，感到万幸。	C			友情(友情)
	彼はそんなことを思っ、時のたつのを恐れながら忘れていた。		他这样想着，不觉忘记了对时间的担心。	C			友情(友情)
	ラスキンは、「耶穌教を信じる」と云えなかった為ばかりに、失恋して、病気にまでなったと野島は記憶している。		野島还记得拉斯金只因为不信基督教就失去恋人以至得病的事情。	A-40			友情(友情)
	杉子も。彼は淋しく、一人ぼっちのような気がして、早く母のもとに帰りたいかった。		杉子也……他感到寂寞和孤独，想尽快回到母亲的身边。	C			友情(友情)
	杉子にしてはいつもより厚く化粧していて、いつもより美しくは見えたと、		杉子一反常态地浓浓地化了妆，显得比任何时候都美丽，	C			友情(友情)
	自分はある所までそれに成功して、道徳的傲りを自分でさえ感じた。		我在某些地方是成功了，甚至感到自己道德的自豪。	C			友情(友情)
	急に汽車のなかの非礼が恥ずかしくなっ、後も見ずに機関車の前を渡った		①他立即对自己在火车上那种非礼行为感到羞愧，就头也不回地从火车头前面走了过去。②立刻感到在火车上的那种无礼举动是可耻的，就头也不回，从机车的前方走过去。③顿时感到羞愧起来，便头也不回地绕过火车头径自走了。	B-1	B-1	B-2	雪国(雪国)
	島村は汽車のなかのぬくみがさめなくて、そとのほんとうの寒さをまだ感じなかったけれども、		①由于车上带下来的暖气尚未完全从岛村身上消散，岛村还没有感受到外面的真正寒冷。②岛村身上还未消掉火车上的暖热，没有感受到外界真正的严寒。③火车里的暖气还没从身上完全散掉，岛村尚未真正感到外面的寒意。	A-15	C	C	雪国(雪国)
	雪の色が家々の低い屋根を一層低く見せて、村はしいんと底に沈んでいるようだった。		①在雪天夜色的笼罩下，家家户户低矮的屋顶显得越发低矮，仿佛整个村子都静悄悄地沉浸在无底的深渊之中。②雪色使每家低矮的屋顶显得愈加矮了，村庄寂静得象是沉没到地下去了。③一家家低矮的屋檐，在雪色中显得越发低矮。村里一片岑寂，如同沉在深渊中一般。	C	C	C	雪国(雪国)
	日光のなかに立っていると、その水の厚さが嘘のように思われて、島村はしばらく眺め続けた。		①站在阳光底下，觉得那些冰块厚得令人难以置信。岛村继续看了好一阵子。②岛村站在日光下，觉得冰厚实得令人不能相信，他暂时继续眺望着。③岛村站在阳光下，看到冰块有那么厚，简直不大相信竟看了好一会儿。	C	C	C	雪国(雪国)
	「うちへ寄っていただこうと思っ、走って来たんですね。」		①“想请你到我家来坐坐，才跑过来的啊。”②“我想请你到我家去，所以跟着跑来了。”③“我是想请你顺便到我家坐坐才跑过来的。”	B-6	A-36	B-6	雪国(雪国)
	壁の向側はどうなってるのだろうと考え、この部屋が宙に吊るさているような気がして来、なにか不安定であった。		①一想起墙壁那边不知是个什么样子，也就感到这房子仿佛悬在半空中，心里总是不安稳。②一想到墙壁的那一边又是怎样的呢，就觉得这个房间是吊在半空中，总有些不稳固的样子。③不知墙的那边是什么样子，想到这里，便觉得这间屋仿佛悬在半空，有点不牢靠似的。	C	C	C	雪国(雪国)
	島村はこわくなって、虚勢を張るように肘枕で転がった。		①岛村有点惊呆了，给自己壮胆似地曲着双臂，把头枕在上面躺了下来。②岛村有点怕了，就装模作样地枕着胳膊躺下来。③岛村不禁替她捏了把汗，故意做张做致地枕着胳膊一骨碌躺下了。	C	B-1	C	雪国(雪国)
	三曲目に都鳥を弾きはじめた頃は、その曲の艶な柔らかなさのせいもあって、島村はもう鳥肌立つような思いは消え、温かく安らいで、駒子の顔を見つめた。		①开始弹奏第三曲《都鸟》的时候，多半是由于这首曲子优美柔和，岛村脸上起的鸡皮疙瘩开始消失了，他变得温情而平和，呆呆地凝视着驹子。②在第三个曲中开始弹断肠的时候，也是由于这个曲子的艳丽柔和，岛村象要起鸡皮疙瘩的感觉消失了，他温暖而又安逸地盯住驹子的面孔。③弹到第三只曲子《都鸟》时，也许是曲调本身柔软缠绵，岛村的鸡皮疙瘩之感已经随之消失，只觉得一片温馨平和。凝视着驹子的面庞。	A-72	A-72	A-75	雪国(雪国)

原文		訳文		分類一覧			作品名
会話文	地の文	会話文	地の文				
それで会いたがって、呼びに来たんじゃないか。		①所以很想见你，才让人叫你的嘛。 ②他不是想和你见一面才叫人叫你来的吗？ ③所以他想见你一面，才打发人叫你来的。		B-6	B-6	B-6	雪国(雪国)
	島村はふっと涙が出そうになって、われながらびっくりした。		①島村情不自禁，眼泪都快夺眶而出，就连他自己也惊愕不已。 ②岛村忽然感到要流出眼泪来，自己也不禁一惊。 ③岛村忽然忍不住要落泪，连自己也莫名其妙。	B-1	B-3	B-17	雪国(雪国)
きつといらつしやると思って、十四日に帰って来たんだわ。		①想你一定会来，所以十四日就赶回来的。 ②因为我以为你一定会来的，所以赶在十四日前回来了。 ③以为你准来，十四日那天就赶了回来。		A-36	A-7	B-1	雪国(雪国)
私がちやうど実家にいたところへ電報が来て、看病したんですわ。」		①正好我在老家，接到电报，我就去护理了。 ②正好我在娘家的时候，给我打来了电报，我就去照料病人了。 ③我那时正在老家，拍了电报来，我就赶去服侍。”		B-1	B-1	B-1	雪国(雪国)
	ハイキングの女学生達の若々しく騒ぐ声が開えているうちに眠ろうと思って、島村は早くから寝た。		①听着徒步旅行的女学生天真活泼的嬉戏打闹声，岛村不知不觉间感到昏昏欲睡，于是便早早入眠了。 ②这时有些徒步旅行的女学生，发出年轻人吵吵闹闹的声音，听着听着他就瞌睡起来，很早就睡下去了。 ③一群徒步旅行的女学生，年轻活泼，嬉闹之声，不绝于耳，听着听着竟睡意朦胧起来，岛村便早早睡下了。	A-38	C	B-2	雪国(雪国)
	向岸の急傾斜の山腹には蒼の穂が一面に咲き揃って、眩しい銀色に揺れていた。		①对岸陡峭的半山腰上开满了芭茅的花穗，摇曳起来，泛起耀眼的银白色。 ②在对岸陡峭的山腰上，苍草的穗子全面开花，摇动着一片眩人眼目的银色。 ③对岸的陡坡上，一片茅草正的抽穗，迎风款摆时，闪着耀眼的银光。	C	C	C	雪国(雪国)
	島村は避ける間もなかった。額に音がして、痛かった。		① 岛村来不及躲闪，栗子咚咚地打在他的额头上，痛极了。 ② 岛村都来不及闪开，额头上就有了响声，觉得很疼。 ③岛村躲避不及，噼里啪啦打在额上，痛得很。	C	C	C	雪国(雪国)
	「ほんとだ。」と、目を閉じているとその熱が頭に沁み渡って、島村はじかに生きている思いがするのだった。		① “真的。”岛村闭着眼睛，一阵热气沁进脑门，他这才直接感受到自己的存在。 ② “实在是的。”岛村闭上眼睛，那热气渗进头部，他直接地感到活力。 ③ “真的。”岛村闭上眼睛，那股热气沁入他的脑门，使他感到自己确实是活着。	B-15	C	B-5	雪国(雪国)
	島村は驚いて、最早ここを去らねばならぬと心立った。		①岛村吃了一惊，不禁暗自想道，已经到该离开这里的时候了。 ②岛村吃了一惊，他拿定主意非离开这里不可了。 ③岛村一惊之下，决意非尽快离开这里不可了。	C	C	C	雪国(雪国)
	目の前に明りの出た家が一軒あって、島村はほっとしたが、		①眼前出现一间透着亮光的房子，岛不禁松了一口气。 ②眼前现出了发出灯光的人家，岛村这才平静下来， ③眼前一户人家灯火明亮，岛村松了一口气，	C	B-15	C	雪国(雪国)
「目玉が寒くて、涙が出るわ。」		①“眼睛冻得快要流出泪水来啦。” ②“眼珠子好冷，流出眼泪了。” ③“眼睛冻得都要淌眼泪啦。”		C	C	C	雪国(雪国)
	天の河は二人が走って来たうしろから前へ流れおきて、駒子の顔は天の河のなかで照らされるように見えた。		① 他们两人跑过来了。银河好像从他们的后面倾泻到前面。驹子的脸仿佛映在银河上。 ② 银河从他们两个人跑过来的背后向前下落，驹子的面容象是照耀在银河中。 ③银河的光从两人跑来的身后，流泻到他们前面，驹子的面庞好似映在银河里。	C	C	C	雪国(雪国)
	大きい極光のようでもある天の河は島村の身を浸して流れて、地の果てに立っているかのようにも感じさせた。		①犹如一条大光带的银河，使人觉得好像浸泡着岛村的身体，漂漂浮浮，然后伫立在天涯海角上。 ② 如大片极光一样的银河，渗入岛村的身体里流动着，他感到宛如站在大地的尽头了。 ③银河犹如一大片极光，倾泻在岛村身上，使他感到仿佛站在地角天涯一般。	C	C	B-5	雪国(雪国)
	人目もあると思って、島村は駒子からそっと離れると、ひとかたまりの子供のうしろに立った。		①岛村顾虑有旁人看见，就悄悄地离开了驹子，站在一群孩子的后面。 ②岛村认为叫人看见不好，就悄悄地离开驹子，站到一堆小孩子的背后去。 ③岛村怕此人注目，便悄悄离开驹子，站在一群孩子的后面。	B-1	B-1	B-2	雪国(雪国)
	その火の子は天の河のなかにひろがり散って、島村はまた天の河へ掬い上げられてゆくようだった。		①这些火星子迸发到银河中，然后扩展开去，岛村觉得自己仿佛又被托起漂到银河中去。 ②火花向银河里边散开，岛村又觉得象是被银河捞上去。 ③火星溅落在银河里，岛村好像又给轻轻托上银河似的。	C	C	C	雪国(雪国)
	なにかせつない苦痛と悲哀とに打たれて、動悸が激しかった。		①一种无以名状的痛苦和悲向他袭来，使得他的心扉激烈地跳动着。 ②一阵喘不过气来的痛苦和悲哀侵袭了他，心头悸动得好厉害。 ③在这令人难耐的惨痛和悲哀的打击下，他感到心头在狂跳。	B-5	C	C	雪国(雪国)

原文		訳文		分類一覧			作品名
会話文	地の文	会話文	地の文				
	幾年か前、島村がこの温泉場へ駒子に会いに来る汽車のなかで、葉子の顔のただなかに野山のともし火がともった時のさまをはっと思い出して、島村はまた胸が震えた。		①島村忽然想起了几年前自己到这个温泉浴场同驹子相会、在火车上山野的灯火映在叶子脸上时的情景，心房又扑扑地跳动起来。②岛村忽然想起，几年前他来温泉场和驹子相会，火车上在叶子容颜的正当中燃起了山野灯火时的情景，他的胸中又在颤抖了。③岛村蓦地想起几年前，到这个温泉村与驹子来相会的途中，在火车上看到叶子的脸在窗上映着寒山灯火的情景，心头不禁又震颤起来。	B-4	B-4	B-4	雪国(雪国)
	保子は十五六のころいびきの癖があつて、親は矯正に苦心したそうだが、		保子自十五、六岁起就有打鼾的毛病，据说她的父母为矫正她这个毛病煞费苦心。	C			山の音
	信吾は耳鳴りかと思つて、頭を振つてみた。		信吾以为是耳鸣，摇了摇头。	C			山の音
里子は生まれてから親がいけなくなつて、影響したんだね		“里子生下来之后，父母感情不好，会受影响的。”		C			山の音
	冷たい手拭でふいた顔に眼鏡をかけるのが、信吾は面倒くさくて、庭を眺めていた。		信吾用凉手巾擦过脸之后，觉得戴老花镜太麻烦，于是他望了望庭院。	A-38			山の音
	松は庭木らしくつくつてなくて、高く伸びていた。		松树没有像庭院的树木那样加以修整，它高高地伸向苍穹。	C			山の音
	気がとがめて、うまく忘れたのかと、信吾は疑つてみた。		信吾怀疑，是不是由于内疚才忘得一干二净呢？	A-76			山の音
	踊りに行ったのを知られてもいいが、修一の女という下心があるので、信吾は突然菊子に言い出されて、少しまごついたらしい。		菊子知道自己去跳舞倒没什么，可自己另有盘算觉得修一的情妇会在那里，这事突然被菊子点出来了，不免有点不知所措了。	C			山の音
	しかしまだ菊子に子供は産れず、守歌のレコオドにもあきたとみえて、このごろは聞かない。		菊子至今还没生育孩子，看样子她对摇篮曲的唱片听腻了，近来也不听了。	C			山の音
あの子はお父さまに悪いと思つて、やきもちもやけやしない。憂鬱ですよ・・・」		那孩子觉得别让爸爸难堪，才不敢忌妒。这是一种忧郁啊。		B-6			山の音
でも、今日はだめですわ、こんな恰好して、失礼ですもの		不过，今天不行。这身打扮太失礼了。”		C			山の音
	町の店々は戸じまりして、これも一夜でさびれ、		街上的店铺已经闭门，街上也是成夜冷落萧条。	C			山の音
	桜はしおれた葉を少し残していたが、それも落ちつくして、裸木になったままだ。		樱花树原先还残存着一些枯枝败叶，但现在也落光，成了秃树。	C			山の音
	その葉はまた薄いようであつた。色も緑が足りなくて、薄黄色かつた。		叶子似乎很薄，颜色也不怎么绿，呈浅黄色。	C			山の音
	保子の母が先立ち、父が死んでみると、田畑は売りつくされて、わずかの山林と家屋敷とが残つた。		保子的母亲先离去，待到父亲辞世之后，大家才晓得田地都卖光了，剩下的仅有山林和屋宇。	C			山の音
	英子は信吾のひとりごとになれていて、そつと信吾を見ているだけだつた。		英子早已习惯于信吾这种自言自语，她只悄悄地瞥了信吾一眼。	C			山の音
夕方は女房がこわくて、帰れないから		傍晚因为怕太太，不敢回家。		A-1			山の音
五六十の堂々たる紳士で、女房がおそろしくて、うちへ帰れないで、		一个五六十岁的堂堂正正的绅士，竟怕老婆，以至不敢回家。		A-40			山の音
	写真屋の修整もあつて、暗さは見えない。		可能经过照相馆修饰了，看不见有什么阴影。	C			山の音
	肩も片方が少しさがつて、やつれた感じだつた。		她微微地耷拉着半边肩膀，面容非常憔悴。	C			山の音
君に迷惑かけて、今日はよそう。		“给你添麻烦了，今天就算了吧。”		C			山の音
	ひどくつかれていて、早く寝床にはいった。		信吾疲惫不堪，早早就钻进被窝里。	B-1			山の音
	間もなく寝入つた信吾は、保子のいびきに目をさまされて、保子の鼻をつまんだ。		很快就进入梦乡的信吾被保子的鼾声惊醒了，他捏住保子的鼻子。	C			山の音
	テルは飼主があつて、鑑札をつけているのだが、		阿照是有饲主的，脖子上套着一块执照牌。	C			山の音
	飼主がろくに食いものを与えないとみえて、のら犬になっていた。		大概饲主没有好好喂养，变成野狗。	C			山の音
うちで小犬が五匹が産れたんだが、もらい手があつて、四匹はかたづいちゃつた。		“母狗在我家产下五只狗崽，已经有主了，四只给要走了。”		C			山の音
	部屋へ案内されるより先きに、泉水にうつる桜に誘われて、信吾はその岸へ行った。橋の上に立って花をながめた。		进入房间之前，信吾已被倒影在泉水里的樱花所吸引，他走向溪畔，站在桥上赏花。	C			山の音
	しかし、気笛を聞いた後で、信吾はふとおそろしくなつて、はっきり目がさめた。		但是，听到汽笛声之后，信吾顿时害怕起来，他完全清醒过来了。	C			山の音
	しかし、北本が死んだことは、ほかからも耳にはいつて、確かである。		然而，北本辞世的消息，也从别人那里听说了。这是千真万确的。	C			山の音
なに？耳が遠くて、聞えないよ		“什么？我耳背，听不见啊。”		C			山の音
	舌もつれて、「く」の音が出ないのだ。		因为舌头不听使唤，发不出“菊子”①的音来了。	A-1			山の音
	信吾はぐったりして、頭を枕に休めた。		信吾精疲力尽，头枕枕头休息了。	C			山の音
	妻に聞えないと思つて、酔いにまぎれて、あまえ声を出しているのかもしれない。		或许他以为妻子听不见，再加上几分醉意，才发出这种撒娇声的吧。	B-6			山の音
	菊子は突あたりそうに立ちどまつて、ぼつと頬を染めた。		菊子驻足，险些撞个满怀，她脸上微微染上了一片红潮。	C			山の音

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	信吾が茶の間に坐ったのを知って、菊子はあわてたように、そこの雨戸をあけた。		菊子知道信吾坐在饭厅里，就赶忙打开那里的木板套窗。 阳光带着春意射了进来。	B-1	山の音
	ふと、菊子も妊娠していて、中絶しようとしているのではないか、と連想がひらめいて、信吾はおどろいた。		突然又联想到菊子也怀孕了，她不是正想做人工流产吗？信吾不禁愕然。	C	山の音
	ごめんなさい、泣かせてしまって。	“真对不起，让孩子哭了。”		C	山の音
	人に教えられて、信吾にもわかっていった。		后来听别人说，信吾才知道是贗品。	B-6	山の音
	房子も里子がきものをほしがって、危いことになったのは、母にも話さなかったとみえる。		看来房子也没跟她母亲谈及里子想要和服，差点出危险的事。	C	山の音
	・・・黒百合と白い花のむしかりとが生けてあって、よかったそうですわ・・・	茶席上の插花就是用的黑百合和开白花的金银花，美极了。		C	山の音
	これを買って帰った日、信吾は藍色の可憐な唇に、危く接吻しかかかって、天の邪恋というようなときめきを感じたものだ。		买面具回家那天，信吾几乎要同它那暗红色的可怜的嘴唇接吻，顿觉一阵心跳，恍如天使的邪恋。	C	山の音
	冬の六時だと早い、信吾は寝床にじっと落ちつけなくて、新聞を取りに起きたりする。		冬天六点尚未天亮，但信吾无法耐心呆在被窝里，于是就起床取报纸去。	A-38	山の音
	うっかりしていて、聞きませんでしたわ。	“刚才没留意，没有听见。”		C	山の音
	音にびっくりして、赤んぼは山を見上げた。		轰鸣声把幼儿惊了，她抬头望着山。	C	山の音
	起き上りそうになったのを、信吾に起きるなど言われて、困っているらしく、頬を薄赤らめた。		她刚要坐起来，信吾便制止说：别起来！她感到有点为难，脸颊绯红了。	C	山の音
	房子が相原の行方を知っていて、たよりしているのか、信吾は疑わしかった。		信吾怀疑：原来房子知道相原的下落才给他寄信的吧？	B-6	山の音
	夏服がいがそがしくて、今日は出られないというのだった		忙于赶制夏服，今天不出门了。	C	山の音
	信吾は自分が先きだろうと思って、ゆっくり歩いたのだが、		信吾以为自己先到，悠悠漫步，	C	山の音
	よけいなことをおしらせして、いけないですけれど。	来告诉您这些多余的话，是不好的，可……		C	山の音
	里子も電気掃除機を珍しがって、菊子について歩いた。		里子也觉得吸尘器很稀奇，跟着菊子走。	C	山の音
	絹子さんは私を若いと思って、からかっているんですね。	絹子认为我不懂世故，嘲笑我。		C	山の音
	大学の木々の梢にだけ、強い夕日が残っていて、歩道はかげっていた。		璀璨的夕照，只残留在大学树梢的树梢上，给人行道上投下了阴影。	C	山の音
	足で蹴られましたから、子供が心配になって、後で医者に行ってみました。	“我挨了一脚，担心胎儿受影响，就去	看医生了。”	B-1	山の音
	そうです、そうお取りになって、結構ですわ。	“是的。您这样理解，很好。”		C	山の音
	絹子は修一の態度にも信吾の訪問にも反感がつのって、興奮しているらしくはあった。		絹子对修一的态度和对信吾的来访都很反感，心情十分激动。	C	山の音
	「寝たの？」と信吾はのぞいたが、寄り添っていて、顔は見えなかった。		“睡着了吗？”信吾望了望她，但她紧贴着自己，看不见她的脸。	C	山の音
	信吾は右に寄ったが、不安を感じて、懐中電灯をつけた。		信吾靠到右侧，感到不安，打开了手电筒。	C	山の音
	線路の土手に咲いていて、電車が通ると花も揺れそうに近かった。		它在铁路的土堤上开花，电车驶过的时候，花摇摇头，显得很近。	C	山の音
	はい、ごいっしょに帰りたいと思って、お電話してみましたの	“都很好。我想跟您一起回去，所以才给您打电话试试的。”		A-36	山の音
	三十分ごろの横須賀線が、夕方は十五分おきに出て、かえってすいていることがあった。		每隔三十分一趟的横须贺线电车，傍晚时分就每隔十五分钟开出一趟，有时左厢后面空荡荡	C	山の音
	二人はなんの縁もなく生存して、相手の存在を夢にも知らない。		两人毫不相干地生存，做梦也不会想到对方的存在。	C	山の音
	お父さんこそ、あの娘がちょっと変っているから、ひそかに魅力を感じて、妙な考えをくどくどもってまわってらっしゃる。	那女孩子有点与众不同，爸爸才悄悄地感到她有魅力，才会没完没了地产生各种奇妙的念头。		B-6	山の音
	そう言えば、ここには三組集まっています、家が三つあるべきかもしれない。		这么一说，这里自然分成三组，也许应该有三个家。	C	山の音
	下草がぼうぼうと長けて、林の中はうす暗かった。		乱草繁茂，林中幽暗。	C	水点
	ふっとそんな思いがかすめて、啓造は立ちどまった。		这思想突然掠过启造脑际，他停住了脚步。	C	水点
	急に視界が開けて、星空が大きくひろがっていた。		视界突然展开，缀着星星的天空显得很宽阔。	C	水点
	その時夏枝は、この嵐が、自分の結婚生活を象徴しているような不吉な予感に襲われて、思わず啓造の胸にすがりついたのだった。		这时不知怎么，夏芝忽然涌上不祥的预感，她不禁把脸紧贴着启造的胸膛。	C	水点

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	「いやに生き生きしているね。何かいいことでもあったのか」と口に出して気がるにひとこと聞えればよいものを、ちよつとも疑うと、疑ったことへの自分嫌悪もあって、もう聞いたですことができなくなる。		其实他蛮可以用轻松的口吻问：“怎么样？看你满脸兴奋，可有什么得意事？”然而，他只要有一丝疑念，便憎恨起自己来，终于不能开口问她。	C	氷点
	夏枝もまた、きかなければ語らない口重なところがあって、それがあつた時は啓造を苦しめた。		夏芝是不大爱讲话的，除非问她，她也就不懒得开口，这常使得启造烦恼，痛苦。	B-14	氷点
	金色だった夕焼けの雲が徐々にむらさきに変わって行き、林の上にはカラスが群れて、さわがしかった。		西边天空中的金色浮云慢慢变成紫色，林梢乌鸦成群，哇哇啼叫。	C	氷点
	出勤時間を気にして、啓造は狂時計をみあげた。		启造抬头看挂钟，担心着上班时间。	C	氷点
	夏枝はやつと啓造の不機嫌な様子に気づいて、陽子をベビーベッドにつれていった。		这时夏芝才发现启造的脸色不对，便把婴儿抱进去。	B-2	氷点
	ソファによって童話の本を読んでいた陽子が顔をあげた。その顔が、いくぶん青ざめている。しかし夏枝はできあがった白いセーターを満足気にながめていて、陽子の顔色に気づかなかつた。		倚着沙发看童话书的阳子抬起了脸，她的脸色有几分苍白，但夏芝正满意地欣赏着刚编织完成的白毛线衣，没有注意阳子的脸色。	C	氷点
	啓造は、徹の目が涙ぐんでいるのに気づいて、ソファから身を起こした。		启造看到彻的眼睛发怒，从沙发坐起来。	C	氷点
	夏枝は思わず涙がこぼれそうになって、用事あげに台所に立っていった。		夏芝眼睛发热，匆匆起身到厨房，假装有事。	C	氷点
	徹は急に気恥ずかしくなつて、陳列してある生地を見上げた。		彻突然感到一阵胆怯，抬头观看陈挂于橱窗的布料，	C	氷点
	テーベはやつぱり弱くつて、役にたちませぬのね。		患过肺病的人身体虚弱，毕竟不挂用。	C	氷点
	顔も体も別人のように引きしまつて、昔よりずつと渋味のある美しい村井であつた。		不论脸型或体格都显得消瘦，结实，比以前更具吸引力。	C	氷点
	急に用事を思い出して、失礼します。	现在突然想起一件急事，失陪啦。		C	氷点
	風の少ない旭川に住みなれて、夏枝は台風を忘れていた。		在这没有风的旭川住久了，夏芝已经把台风给忘了。	C	氷点
	啓造は、のんきな男の調子につられて安心した。		被这人轻松的口吻所影响，启造也安心了。	B-3	氷点
	どのぐらいつつ眠つたのか、大相撲の中継放送が遠くから聞こえていたが、だんだん近くなつて、啓造はハッキリと目をさました。		不知睡了多久，启造听到远远的收音机播放相关的声音，这声音逐渐接近，启造完全清醒过来。	C	氷点
	まぶたが波にこすられて、びりびり動くのがわかつた。		眼皮被波浪擦碰着，不住地跳动，	C	氷点
	抱かれたことがうれしくて、一所懸命つるを折っていた。		她很高兴启造抱她，拼命地折着纸。	C	氷点
	そのことに気づくといつそう血がのぼつて、首すじまであかくなつた。		而意识到自己脸红时，心里一慌，竟连脖子都红了，	C	氷点
	留守に致しまして、失礼申しあげました。	对不起，怠慢了客人。		C	氷点
	台風之夜、啓造が死んだと思つて失神した。		台风之夜听到启造遭难而昏厥过去。	A-57	氷点
	「・・・わたしは少し気になって部屋を見せてくれと、いたんですよ」	・・・我不大放心，所以查看了一下她的房间。		A-36	氷点
	夏枝は何となく自分にかわりのあることをいい出されそうな気がして、落ちつきなくイスから立ち上がった。		夏芝本能地觉得事情与她有关，而从椅子上站起来。	A-57	氷点
	ふいと肩に手をおかれて、おどろいただけだよ。	突然被按着肩，吓了一跳吗？		C	氷点
	試験が近づいて、落ちつかないんじゃないかな	考试快到了，很紧张嘛。		C	氷点
	啓造は恐ろしくなつて、聖書の言葉を思い出そうとした。		启造感到惧怕，想找些圣经的辞句来自我安慰，	C	氷点
	啓造は、徹が一体どんなことをしたのかと、学校からの手紙を思つて、その夜はなかなか眠ることができなかつた。		启造不知道学校究竟为什么找他，他不安地整夜辗转不能入眠。	C	氷点
	「へえ、陽子も名士級だね。なかなか多いじゃないか」中には男生徒からの年賀状もあるのを見て、徹がひやかした。		“嘿！阳子的名气不小啊，这么多贺年卡。”彻看到其中也有男生寄来的贺年卡，便开玩笑地说。	B-2	氷点
	スチームが通つていて、店内あたたかだった。		餐厅内有暖气设备，非常暖和。	C	氷点
	北原の言葉におどろいて、夏枝が顔を上げた。		夏芝吓了一跳，抬起脸。	C	氷点
	啓造は何となく入りそびれて、隣の石油スタンドの方に歩いて行った。		启造有些胆怯，便向旁边的石油灯方向走去。	B-2	氷点

原文		訳文		分類一覧		作品名
会話文	地の文	会話文	地の文			
	ここへ這入(はい)ったら、どうにかなると思(おも)って竹垣(たけがき)の崩(くず)れた穴(あな)から、とある邸内(てい内)にもぐり込んだ。		①我看到一个竹篱的破洞，心想从这儿钻进去总该有办法的，便从洞里窜进了一家屋子。②心想，若是爬进去，总会有点办法的。于是，咱家从篱笆墙的窟窿穿过，窜进一户人家的院内。	B-2	A-38	吾輩は猫である(我是猫①②)
	しかしせっかくな主人が熱心に筆を執(と)っているのを動(うご)かしては気の毒(にく)だと思(おも)って、じっと辛棒(しんぼう)しておった。		①但是一想主人特地提笔来这么专心致志地作画，我倘使动弹一下，是很对不起他的，因此，只好使劲地忍耐着。②不过，姑念难得主人潜心于握笔挥毫，怎能人心动身？于是，强忍住哈欠，一动不动。	A-37	A-38	吾輩は猫である(我是猫①②)
	彼は純粹(じゆんじゆん)の黒猫(くろねこ)である。わずかに午(ご)を過ぎたる太陽(たいやう)は、透明(とうめい)なる光線(こうせん)を彼の皮膚(ひふ)の上に抛(な)げかけて、きらきらする柔毛(にこげ)の間(ま)より眼(め)に見えぬ炎(えん)でも燃(も)え出(い)ずるよう(よう)に思(おも)われた。		①它是一只纯黑的猫黑猫。刚刚偏午的太阳把透明的光线射在它的皮肤上面，从那亮闪闪的柔毛之中，好像发出一种眼不能见的火焰。②它是一只纯种的猫黑猫。刚刚过午的阳光，将透明的光线洒在它的身上，那晶莹的茸毛之中，仿佛燃起了肉眼看不见的火焰。	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	否碗底(わんでい)の様子(ようす)を熟視(じゆくし)すればするほど気味(きび)が悪(わる)くなって、食(た)うのが厭(いと)になったのである。		①不但这样，越是细看碗底的样子，越觉害怕，简直不想吃它了。②相反，越是仔细看碗底里的丑样，越觉得渗人，根本不想吃。	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	齒(は)が餅(もち)の肉(にく)に吸(す)取(と)られて、抜(ぬ)けるように痛(いた)い。		①牙齿被年糕吸引着，像拔牙一样地疼痛。②牙齿被年糕牢牢地钳住，就像被揪掉了似的疼。	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	辛防(しんぼう)が肝心(かんじん)だと思(おも)って左右交(か)わる交(が)わるに動(うご)かしたが…		①我想：忍耐是要紧的，于是左右两腿轮流动作起来，②心想：最重要的是忍耐，便左右爪交替着伸缩。	A-38	B-2	吾輩は猫である(我是猫①②)
	ここで人に来(こ)られては大変(だいぜん)だと思(おも)って、いよいよ躍(や)っきとなつて台所(だいしよ)をかけ廻(まわ)る。		①心想：这个当儿要是有人进来，可就糟了，因此，更加抖起劲来，在厨房里回旋地乱跑。②这当儿有人来，那还了得！咱家跳得更高，在厨房里绕着圈儿跑。	A-37	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
いいえ。何(なに)だか混雑(こんさつ)して要領(ようりやう)を得(え)ないですよ。		①不啊，有点混乱，不得要领呢！②唉，这么乱糟糟的，不得要领。		C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	「君(きみ)不相(あ)いかわらず)やってるな」と今(いま)までの行き掛(か)りは忘(わ)れて、つい感投(かんと)詞(じ)を奉(ほう)呈(てい)した。		①我终于忘记了刚才的一切，不由对他奉承了一声赞叹：“老兄真是不改本色哪！”②咱家忘了旧恨新仇，不免奉献(とんが)。	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	しばらく話(わ)しが途切(と)れて吾輩(わが輩)の咽喉(のど)の耳(みみ)に入る。		①谈话暂时终止。我的喉头的响声，传进了主客的耳朵。②一时谈话中断，咱家的喉头响声传进主客二人的耳鼓。	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
ええきつと風邪(かぜ)を引(ひ)いて咽喉(のど)が痛(いた)むんでございますよ。		①是呀，准是伤了风，喉咙不舒服的缘故罢。②是呀，一定是受了风寒，嗓子疼啦。		C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
掃(は)り道(みち)にもその事(こと)ばかりが頭(かぶ)の中(なか)にあつて苦(くる)しくてたまらない。		①在归途中，我的头脑也完全为这个噩耗所占据，痛苦得不能支持。②归途中满脑子装的全是这件事，痛苦极了。		C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
はてな今(いま)時分(じぶん)に呼(よ)ばれる訳(わけ)はないが誰(たれ)だろうと水(みづ)の面(おもて)をすかして見(み)ましたが暗(く)くて何(なん)にも分(わ)りません。		①这么夜深，哪里会有人呼唤我呢？我透过水面打算看看到底是谁，水面一片漆黑，什么也看不清。②天哪！这个时辰，怎么会有人喊我？是谁呢？我凝神注视着水面，除了一片昏黑，什么也不见。		C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
その返(こた)事が大き(おほ)かったものですから静(しず)かな水(みづ)に響(ひび)いて、自分(おれ)で自分(おれ)の声(こゑ)に驚(おど)かされて、はっと周囲(しうい)を見(み)渡(わた)しました。人も犬(いぬ)も月(つき)も何(なん)にも見(み)えませんが。		①回答的声音很大，穿破了寂静的流水，自己都给自己的这个声音吓住了，惶惶地朝四周观望，不见一个人，不见一只狗，看不见月亮，也看不见任何东西。②声音太大，竟在静静的水面上发出回响。我被自己的语音吓住，蓦地向四周仔细一瞧，人儿、狗儿、月儿、都不见了。		C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
その時(とき)に私(わたし)はこの「夜(よる)」の中(なか)に巻(ま)き込ま(こ)まれて、あの声(こゑ)の出(い)る所(ところ)へ行(い)きたいと云(い)う気(き)がむらむらと起(お)つたのです。		①这时，我被这茫茫的黑‘夜’迷住了，不由自主地产生一种要发出声音的地方走去的愿望。②我被如此良宵迷住，不由的萌发一个念头：想到发出声音的地方去。		C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
飛び込(こ)んだ後(あと)は氣(き)が遠(とほ)くなつて、しばらくは夢(ゆめ)中(ちゆう)でした。		①跳下去以后，失了知觉，一时好像是在梦中②跳下以后人事不省，顿时如在梦中。		C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	うらかな春(はる)日(び)は一流(いちりゅう)の雲(うみ)も見(み)えぬ深(こゝろ)き空(そら)より四海(しやうかい)天下(てんか)を一度(いちど)に照(て)らして、十坪(じゅうへい)に足(あ)らぬ庭(にわ)の面(おもて)も元(もと)日の曙(あけぼの)光(ひかり)を受け(う)けた時(とき)より鮮(あざや)かな活(い)気(き)を呈(てい)している。		①清丽的春日，从万里无云的深空中普照着大地；琴师家不到十坪的庭园，比受着元旦的春光那天还更有生气。②暖煦煦的太阳从万里无云的高空普照四海。那三丈见方的庭院，比元旦曙光临门时显得更加生气盎然。	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	返(こた)事が氣(き)に入(い)らないと見(み)えて妻(つま)君(くん)はまた「あなたちよつと」と出(い)直(な)す。		①女主人似乎不大满意这个回答，又说了一声：“我说！”②妻子似乎不对心思，便又重复一句：“哎，你听我说呀！”	B-4	B-2	吾輩は猫である(我是猫①②)

原文		訳文		分類一覧		作品名
会話文	地の文	会話文	地の文			
	どうです奥さんこの猫は鼠を捕りますかね」と吾輩ばかりでは不足だと見えて、隣の室(へや)の妻君に話しかける。		①“・・・大嫂！这只猫捉老鼠吗？”看样子，光是我一个人做招待员还嫌不够，所以又和隔壁屋里的女主人扯起话来。②似乎捉弄我一个还不够，他又和隔壁的女主人攀谈起来。	A-36	B-4	吾輩は猫である(我是猫①②)
	「へえ」と細君は挨拶のしようもないと見えて簡単な答えをする。		①“嗯！”女主人似乎不知如何应答才好，只好简单地这样说了一声。②“嗯。”女主人不知怎样回答才好，只得虚应一声，	B-9	B-8	吾輩は猫である(我是猫①②)
	王様はまだ未練があったと見えて、余った三冊をいくらで売ると聞くと、やはり九冊分のねだんをくれと云うそうです。		①皇帝大约还不死心，又问剩下的三本卖多少钱，回答说还是和九本的价钱一样。②皇帝还有点恋恋不舍，问那女人，剩下的三本书要多少钱。那女人还是要九本书的钱。	B-4	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	何だかごたごたして私には分りませんわ		①那么乱七八糟一大套，我听不懂。②那么乱糟糟的，我可不懂！	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	「きょうはその東風子(とうふうし)の失策物語を御報道に及ぼうと思つて忙しいところをわざわざ来たんだよ」		①今天我是来报告东风的失败经过，特地百忙之中赶来的。②今天，我就是为了报告东风君惨败的故事，才百忙之中专程来访的哟！	C	B-6	吾輩は猫である(我是猫①②)
	「ちと伺いたい事があって、参つたんですが」		①有一件事情要请教，所以来拜访的。②有事请教，特来拜访。	A-36	c	吾輩は猫である(我是猫①②)
	主人はあっ気(げ)に取られて無言で二人を見ている。		①主人愣住了，一声不响地望着他们两个人。②主人愣了，默默地瞧着二人。	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	「へえー、そうですか」とこればかりは迷亭にもちと唐突(とうとつ)過ぎたと見えてちょっと魂消(たまげ)たような声を出す。		①这一句似乎很出迷亭先生的意外，他发出吃惊的声音说：“嘿，是吗？・・・”②“噢，是吗？”听到这里，迷亭先生也感到过于离奇，发出了惊叹之声。	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	「それについて、あなたに伺おうと思つて上がったんですがね」		①也为这件事，今天想来找你谈谈。②想就这件事情，才特来拜访呢。	C	B-6	吾輩は猫である(我是猫①②)
	主人は無言、さすがの迷亭もこの不意撃(ふいうち)には胆(きも)を抜かれたものと見えて、しばらくは呆然(ぼうぜん)として痛(おこり)の落ちた病人のように坐っていたが、		①主人不用说，就连迷亭先生也被这意外的袭击吓得魂飞魄散，暂时呆坐着，活像一个患疟疾的人在寒热退去之后的情形一样。②不要说主人，就连善于逢场作戏的迷亭先生也面对这突然袭击，表现得失魂落魄，顿时茫然，活像疟疾刚刚发作，呆呆地坐在那里。	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	「是非寒月君の事を根掘り葉掘り御聞きにならなくっちゃ御帰りにならないと云う決心ですかね」と迷亭も少し気持を悪くしたと見えて、いつになく手障(てざわり)のあらひ言葉を使う。		①迷亭先生似乎也不很愉快起来，破例的用了不好听的直率的话说：“你今天是不是下了决心，非刨根挖底把寒月的事情弄个一清二楚就不回去呢？・・・”②您是否下定了决心，如不把寒月的事情刨根问底地查个水落石出，就绝不肯走？”迷亭有些怏怏不快，一反常态，话说得十分粗鲁。	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	鼻子は学問上の質問は手に合わんと断念したもの見えて、今度は話題を転ずる。		①鼻子夫人似乎知道学问方面的问题她是应付不了的，所以死了心不再多问，便把话头一转：“②鼻子夫人意识到进行学术性对话，她不是对手，于是自甘暴弃，调转头说：“	A-36	A-38	吾輩は猫である(我是猫①②)
	「それでも帽子も洋服も、うまい具合に着られて善かった」		①“不过，帽子和衣服总算还合适，也就不坏了。”②“尽管是估计，可是帽子和衣服还都穿得合体，总算好嘛！”	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	「なるほど迂闊(うかつ)だな」と主人は己(おの)れより迂闊なもの天下にある事を発見して大(おお)い満足(まんぞく)の体(てい)に見える。		①“真够迂阔！”主人说，他好像发现世间还有比自己更迂阔的人，感到十分高兴。②“真够迂腐的了。”主人发现天下竟还有比自己更加迂腐的人，显得十分惬意。	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	「へえ、せんだって御嬢様からいただきましたので、結構過ぎて勿体(もったいない)ないと思つて行李(こうり)の中へしまっておきました、		①“嗯，这是前些日子小姐赏给我的。我觉得太漂亮了，不敢用，一直收在箱子里面，・・・”②“是的。前些天小姐赏给了我。可是，我觉得太漂亮，不好意思戴，就放在箱子里。・・・”	C	B-1	吾輩は猫である(我是猫①②)
	吾輩も少し変だと思つて、例の尻尾(しっぽ)に伺いを立てて見たら、その通りその通りと尻尾の先から御託宜(ごたくせん)があった。		①回头一想，自己也感到这个想法有点反常，就把尾巴竖起来向它请教，鼻尖几默示我说：“对，对，你的想法很对。”②自己也感到这念头有些反常，便按惯例竖起尾巴，向它求教。于是，尾巴尖里发出神谕说：“言之有理！”	B-1	B-2	吾輩は猫である(我是猫①②)
	「いや、まことに言語同断(ごんごどうだん)で、ああ云うのは必竟(ひっきよう)世間見ずの我儘(わがまま)から起るのだから、ちつと懲(こ)らしめのためにいじめてやるが好かろうと思つて、少し当つてやつたよ」		①“是呀，实在是胡闹已极，那样的家伙都是因为太没见过世面了，应该给他们一点苦头吃吃，教训教训，所以稍微捉弄了他一下。”②“唉，简直是荒谬绝伦！所以如此，全怪他没见过世面，太任性。为了稍微教训一下，觉得应该给他点苦头吃，所以，轻轻地治了他一下・・・”	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)

原文		訳文		分類一覧		作品名
会話文	地の文	会話文	地の文			
	鈴木君はこいつ、この様子では、ことによるとやり損なうなと疍(かん)づいたと見えて、主人にも判断の出来そうな方面へと話頭を移す。		①鈴木先生大概感觉到，这家伙，要照这样搞下去的话，说不定这一趟也是白跑了的，于是就把话头引到主人能够理解的这个方面来：②铃木心想：这个家伙！看样子，弄不好我会白跑腿的。有了这样的预感，他才调转头，指向连主人也不难做出判断的话茬。	A-38	B-6	吾輩は猫である(我是猫①②)
	「ほんとに曾呂崎の焚いた飯は焦(こ)げくさくて心(しん)があって僕も弱った。」	①「真的是，曾吕崎煮的饭总是枯焦夹生，我也没法子吃。……」②真的，曾吕崎煮的饭又糊，又夹生，我也吃不下。……」		C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	その祟(たたり)りで今じゃ慢性胃弱になって苦しんでいるんだ。	①“……现在害了慢性的胃病，苦得要死。……”②“……如今成了慢性胃炎，在遭罪哪。……”		C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	いよいよ西洋料理に有りついたなと思つて契約履行を逼(せま)ると迷亭すまして取り合わない」	①“……我想这顿西餐吃完了，就催他履行契约，谁知他竟满不在乎地不承认那个约定。”②“……我心想：这顿西餐算是吃完了，便催他履约。不料他竟装疯卖傻地不理那个碴！”		B-1	B-2	吾輩は猫である(我是猫①②)
	立場を換(か)えて見ればこのくらい単純な事実が彼等の社会に日夜間断なく起りつつあるのだが、本人逆(のぼ)せ上がつて、神に呑(の)まれていいるから悟りようがない。製		①要是换一个立场来看，像这种简单的事实，在人类社会里可说日夜不断地都在涌现着的，然而人们沉迷心窍，悒于神力，竟一点也看不出。②如果换个立场就会清楚，这么简单的事实，本是人类生活中日以继夜，层出不穷的；然而，当事者却头昏眼花，悒于神威，因而难得清醒。	C	A-35	吾輩は猫である(我是猫①②)
	いや実際の事を云うと寒月君自身が気が変(か)になつて深夜に飛び出して来たものではあるまいかと、はつと思つたくらいよく似ている。		①说实话，这位君子实在太像寒月先生，竟至使人怀疑是不是寒月先生本人发了神经，深更半夜跑到这儿来了。②不，老实说，由于这两个人太相似，几乎令人吃惊：是否寒月神经失常，深更半夜跑了出来。	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	きっと人が英語を知らないと思つて悪口をおつしやつたんだよ	①“……一定是明知人家不懂英语，就故意用英语来骂人的。”②“……一定以为我不懂英语，就张口骂人。”		B-1	B-1	吾輩は猫である(我是猫①②)
	最前(さいぜん)細君と喧嘩をして一反(いつたん)書齋へ引き上げた主人は、多々良君の声を聞きつけて、のそのそ茶の間へ出てくる。		①先前和女主人拌了嘴的主人，听到了多多良先生的声音，又摇摇摆摆地走进饭厅里来了。②而适才和妻子吵架，一度回到书房的主人，听到多多良的语音，又徐步踱入客厅。	B-4	B-4	吾輩は猫である(我是猫①②)
	耳に喰(く)ひ下がつたのは中心を失つてだらりと舌が横顔に懸る。		①咬住我的耳朵的家伙，失去了重心，晃悠悠地吊在我的脸颊旁边。②咬住咱家耳朵的那家伙身子失去平衡，长拖拖地悬在咱家的脸上。	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	あの男が卒業後図書館に足が向くとはよほど不思議な事だと思つて感心に勉強するねと云つたら先生妙な顔をして、なに本を讀みに来たんじゃない、今門前を通り掛つたらちよつと小用(こよう)がしたくなつたから拝借に立ち寄つたんだと云つたので大笑をしたが、	①心想老梅这家伙已经毕业了，还要上图书馆来，实在是件怪事。我就对他这样说，这么用功，真是可佩！老梅的回答才妙哩。他说，我哪里是进来看书的，刚才走过门口，忽然想要小便，所以才进来的。②此公毕业后还跑图书馆，我觉得非常出奇，便敬佩地说：‘真用功啊！’而他却做了个怪脸，说：‘哪里，我不是来看书的。刚才从门前路过，突然想小解，这才进来借地方方便一下。’说完哈哈大笑。		C	B-2	吾輩は猫である(我是猫①②)
	「根が俳句趣味からくるのだから、あまり長たらしくて、毒悪なのはよくないと思つて一幕物にしておいた」	①因为它源于十七字诗的趣味，要是太长太罗嗦，就不相宜，所以编成了一个独幕剧。②因为源于俳风，如果冗长无聊就不好，所以，写成了独幕剧。		A-36	A-36	吾輩は猫である(我是猫①②)
	実はただ今詩集を見せようと思つてちよつと寄つて参りましたが、	①老实说，我本想请她看看我的稿子，才到这边来的。②坦率地说，我本想给她看看诗集，到她家去过，		B-6	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	いくら駄弁家の寄合でもそう長くは続かんものと見えて、談話の火の手は大分(だいぶん)下火になつた。		①不论是怎样的雄辩家的集会，似乎也不能持续的过久的，所以，他们的谈话也由热烈走向冷静了。②不论是什么样的雄辩家盛会，也不会持续多久的。终于，谈话的火势不旺了。	A-36	A-77	吾輩は猫である(我是猫①②)
	のみならずまだ秋の取り付きで運動中に照り付けられた毛ごろもは、西日を思う存分吸収したと見えて、ほてつてたまらない。		①而且正当初秋，我的皮衣裳在运动中晒太阳晒着，大概已经吃足了阳光，热得简直受不了。②何况恰是初秋，运动中咱家日晒下的毛皮大衣，大概饱吸了夕照的阳光，身子烤得受不住。	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	「ああ、あんまり生き過ぎつて自分の年を忘れてね。……」	①“因为活得大长，连他自己的岁数都记不得了。……”②“唉！活得大长以致忘记了自己的年龄。”		C	A-40	吾輩は猫である(我是猫①②)
	本当の三介もいる。風邪(かぜ)を引いたと見えて、このあつのにちゃんちゃんを着て、小判形(こばんなり)の桶(おけ)からさあど旦那の肩へ湯をあびせる。		①正牌的搓澡员也在场，光景是伤风感冒了，所以那么热还居然穿着背心，用小木桶向老爷的肩膀上浇着热水。②然而，真正的搓澡人也有。他大概患了感冒，这么热，还穿着坎肩。他从一个袖珍书本一般大的小桶里沾水，往师傅的肩上浇。	A-36	C	吾輩は猫である(我是猫①②)

原文		訳文		分類一覧		作品名
会話文	地の文	会話文	地の文			
	こう順々に書いてくると、書く事が多過ぎて到底吾輩の手際(てぎわ)にはその一斑(いっばん)さえ形容する事が出来ん。		①・・・・・・要像这样一个一个写下去的话,要写的东西太多了,凭我的力量必然会挂一漏万的。②照此一一写来,因为要写的事情太多,毕竟不是咱家这点本事所能描其详情于万一的。	C	A-1	吾輩は猫である(我是猫①②)
	前(ぜん)申す通り主人は立派なる逆上家である。こう勢(いきおい)に乗じてぬすつとうを追ひ懸ける以上は、夫子(ふうし)自身がぬすつとうに成つても追ひ懸けるつもりと見えて、引き返す気色(けしき)もなく垣の根元まで進んだ。		①前面已经介绍过,主人是一个卓越的上火家,他在这种情势之下,似乎是非追下去不可,哪怕夫子自己变成强盗,也在所不惜。他已经到了篱笆底下,②如上所述,主人是个出色的上火专家。他似乎以为既然乘兴穷追寇,那就宁肯老夫子沦为寇贼,也要追下去的。因此,他毫无收兵之意,一直冲到篱笆根下。	C	A-37	吾輩は猫である(我是猫①②)
	落雲館は授業中と見えて、運動場は存外静かである。		①落云馆中学光景正在上课,运动场上意外地寂静。②落云馆好像正在上课,运动场上异外地肃静。	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	やがて時間が来たと見えて、講話はぼたりとやんだ。		①不久,大概是时间到了,讲话突然停止。②不多时,大约下课时时间到了,讲话声戛然而止。	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	聞きたくて聴いたのではない。		①我并不是为了要听而去听的,②不是想要听才听的。	A-57	B-6	吾輩は猫である(我是猫①②)
	驢馬(ろば)が銀の井(どんぶり)から無花果(いちじゅく)を食うのを見て、おかしうってたまらなくて無暗(むやみ)に笑ったんだ。	①一一庫里西帕斯看见一只驴吃银碗里的无花果,就狂笑起来。②他看见毛驴吃银碗里的无花果,觉得滑稽,忍不住大笑起来。		B-1	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	見るからに不愉快な容貌(ようぼう)が出来上ったと思ったら「いやこれは駄目だ」と当人も気がついたと見えて早々(そうそう)やめてしまった。		①主人自己也似乎觉察到了这一点,说了一句:“这个使不得!”马上停止了。②他觉得这样子太难看,自己也意识到:“这一招使不得!”便立刻停止。	C	B-2	吾輩は猫である(我是猫①②)
	迷亭君は襖(ふすま)の影から笑いながら立見をしていたが、もういい時分だと思つて、後(うし)ろから主人の尻を押しやりながら「まあ出たまえ。そう唐紙(からかみ)へくっついては僕が坐る所がない。速慮(そりょ)せず前へ出たまえ」と無理に割り込んでくる。		①迷亭先生一直嘻开了嘴,立在纸门旁边望着,到这时候觉得已经够劲了,便从后边推着主人的屁股,说:咳!往前边去,这么紧贴着花纸格(“隔”字的右边)子,弄得我没有地方坐了。别客气,往前边去!”说着就硬挤了进来。②迷亭君站在纸屏后笑着观赏,觉得已经够瞧的啦,便从主人身后推了一下他的腕,硬是插嘴说:“喂,滚吧!你那么紧靠着纸隔门,我就没有座位啦。不要客气,到前边去!”	B-2	B-2	吾輩は猫である(我是猫①②)
	その上白シャツと白襟(しろえり)が離れ離れになつて、仰(あお)むくと間(ま)から咽喉(のどぼとけ)が見える。		①此外,白衬衫和礼服的白硬领各不相同,一抬起头来就露着喉骨。②何况白衬衫和白硬领各自为政,一仰脸,便从空档中露出了喉骨。	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	主人はどうかしてこの鉄扇の由来を聞いて見たいと思つたが、まさか、打ちつけに質問する訳には行かず、と云つて話を途切らすのも礼に欠けると思つて「だいぶ人が出ましたらう」と極(き)めて尋常な問をかけた。		①他原本很想询问一下这柄铁扇的来历,又觉得不便轻易开口。然而停顿住没有话说,也仿佛有些失礼,所以发了一个无关轻重的问题:“会上人得到很多吧?”②他本想打听一下铁扇的来历,又不便刨根问底;谈话中断吧,又有些失礼,于是,便极其随便地问道:“去了很多人吧?”	A-36	A-38	吾輩は猫である(我是猫①②)
	先生悟つたような事を云うけれども命は依然として惜しかつたと見えて、非常に心配するのさ。	①那位先生虽然开口闭口说着大彻大悟的话,光景对于性命还是十分爱惜的,他非常忧虑,②位先生嘴上讲什么超越生死,但似乎依然惜命,十分担心哪!		C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	主人はようやく刑事が踏み込んだ理由が分つたと見えて、頭をさげて泥棒の方を向いて鄭重(ていじゆう)に御辞儀をした。		①主人这才明白了法警临门的理由,连忙冲着小偷恭恭敬敬地纳头行礼。②主人似乎这才明白刑警来干什么。他低着头,面对偷儿毕恭毕敬地施礼。	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	泥棒も驚ろいたに相違ないが、まさか私(わたし)が泥棒ですよと断わる訳にも行かなかつたと見えて、すまして立っている。		①小偷一定也大吃一惊,然而似乎又不便拦阻说“我是小偷”,所以依然袖着手呆立不动,②偷儿肯定是要吃惊的,但又不得声明:“我是小偷!”只好佯作不知,依然袖着手站在那里。	C	B-9	吾輩は猫である(我是猫①②)
	迷亭もここにおいてとうてい济度(さいど)すべからざる男と断念したものと思つて、例に似ず黙つてしまった。		①到了这个地步,迷亭先生似乎已经看透了这人无法超度,所以断念了,于是破例地一句话也不再讲。②谈到这儿,迷亭绝望了,似乎觉得主人已不可救药,竟一反常态地默默无语;	A-38	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	主人却以为难得一次说服了迷亭,十分开心。		①而主人却以为难得有这么一次竟把迷亭先生说服了,得意非凡。②主人却以为难得一次说服了迷亭,十分开心。	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	頭が出ては起こされる時に迷惑だと思つて、かくもぐり込んだのであろう。		①大约他以为如果把头露在外面,一到被催着起来的当儿就很难对付,所以这样缩了进去的吧。②他大概是讨厌一露头就会被叫起床来,因此才将头缩进去,	A-36	A-37	吾輩は猫である(我是猫①②)
	「今日は天祭日ですから、朝のうちにちょっと上がろうと思つて、八時半頃から家(うち)を出て急いで来たの」	①“因为是大节日,我想得赶早晨来,所以八点钟就急急忙忙从家里动身了。”②“今天过节,我就想早晨来一趟,所以八点半就急忙走出家门了。”		A-7	A-36	吾輩は猫である(我是猫①②)

原文		訳文		分類一覧		作品名
会話文	地の文	会話文	地の文			
	細君も仕方ないと諦(あきら)めて、戻った品をそのまま戸棚へしまい込(こ)んで座に帰る。		①女主人也绝念了，知道无法可施，只好把领回来的东西原包收进了壁橱，重新落座。②妻子也觉得只好算了，将退还的物品放进壁橱，便回到自己的座位。	B-9	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	その切なさの余り、別に分別の出所(でどころ)もないから監督と名のつく先生のところへ出向いたら、どうか助けてくれるだろうと思って、いやな人の家(うち)へ大きな頭を下げにまかり越したのである。		①焦急到了极点，不得已才想起到名义上是自己的班主任的先生家里来，或许可以得到帮助，是在这样一种思想支配之下，才搭拉着一个大脑袋来拜访平常他所讨厌的人家的。②苦痛之余，又想不出什么好主意，这时想到：如果去班主任老师家，也许能有点办法。于是，将自己的大脑袋硬是运到他所讨厌的这个家里来。	B-6	A-36	吾輩は猫である(我是猫①②)
せんだっては無間(むやみ)にあるかせられて、足が棒のようになった」		①“・・・上次带我走苦了，走得两腿和棍子一样。”②前些天硬是拉我去，腿都直了。”		C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	この時まで黙然(もくねん)として虎の話を褒(うら)やしそくに聞いていた武右衛門君は主人の「そうさな」で再び自分の身の上を思い出したと見えて、「先生、僕は心配なんですけど、どうしたらいいでしょう」とまた聞き返す。		①本来一直在旁边羡慕地听着老虎谈的武右卫门，一听到主人说“这个嘛”的时候，仿佛又重新想起了自己身上的事情来，催问道：“先生，我很着急，怎么办才好呢？”②武右卫门一直以羡慕的心情默默地听别人讲“话说老虎”，忽听主人说：“是么！”这时似乎又想起自己的事。重又问道：“老师，我很担心，怎么办呢？”	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	「さあ行きましょう。今日は私が晚餐(ばんさん)を着(お)ごりますから、一それから運動をして上野へ行くとちょうど好い刻限(くげん)です」としきりに促(うな)がすものだから、主人もその気になって、いっしょに出掛けて行った。		①“走吧。今天我请吃晚饭。一一吃完了晚饭，散散步走到上野，恰好是是时候。”由于寒月先生直催个不停，主人也动了心，一同出去了。②“好啦，走吧！今天我请你吃晚饭。然后后活动活动，到达上野的时辰刚好是最佳时刻。”由于寒月频频催促，主人也动了心，便一同出发了。	C	B-2	吾輩は猫である(我是猫①②)
「ともかくも我々未婚(むこん)の青年は芸術(げいゆん)の靈氣(れいき)にふれて向上(こうじやう)の一路を開拓(かいたく)しなければ人生(じんせい)の意義(いぎ)が分からないですから、まず手始めにヴァイオリンでも習(な)おうと思って寒月君にさつきから経験(けいけん)譚(たい)をきいているのです」		①东风先生说：“总而言之，我们未婚的青年如果不和艺术的灵气交接，以开拓向上的一条道路，那就不可能了解人生的意义。因此我才想着手学习小提琴什么的，刚才特向寒月请教他的经验呢。”②“总之，我们未婚青年必须接近艺术的灵性，开拓向上的道路，否则，就不可能了解人生的意义。为此，我以为，首先必须从小提琴学起，所以刚才才请寒月君讲讲经验谈的。”		C	A-36	吾輩は猫である(我是猫①②)
「先生はどうも性急(せうかち)だから、話がしにくくて困ります」		①寒月先生说：“先生可是太性急了，像这样子我就没法子讲下去了。”②“先生太性急，故事就讲不下去，真发愁！”		C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
「思い切(き)って飛び込んで、頭巾(ずきん)を被(か)ぶったままヴァイオリンをくれと云いますと、火鉢(ひばち)の周囲(まわり)に四五人小僧(こぞう)や若僧(わかしゅ)がかたまつて話をしていたのが驚(おどろ)いて、申し合せたように私の顔を見ました。		①寒月先生说：“我不顾一切地闯了进去，头巾也不脱，就说：我要买小提琴！在火钵旁边谈话的小伙子吃了一惊，不约而同地看看我的脸。”②“我心一横，闯了进去，说：‘卖给我一把小提琴！’这时，火钵旁有四五个小伙计和小崽子在说话。他们惊惶之余，不约而同地朝我看來。		C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
	独(ひとり)り独仙(どくせん)君に至(いた)っては機外(きがい)の機(き)を弄(ろう)し過ぎて、少々疲労(ひろう)したと見えて、碁盤(い)の上(うへ)のしかかって、いつの間(ま)にやら、ぐうぐう寝(ね)ている。		①只有独仙先生仿佛运用机外之机过了度，有点疲倦了，伏在棋盘上面，不知从什么时候起呼呼睡着了。②惟有独仙，似乎由于过分地巧用机关，有些累了，所以伏在棋盘上，不知什么工夫已经酣然入梦。	A-38	A-36	吾輩は猫である(我是猫①②)
「這(こ)入(い)らうと思(おも)つたら巾着(きんちゃく)を忘(わ)れたのに気がついて、廊下(らうか)から引き返(かへ)したんだ。		①迷亭先生说：“他刚要往温泉里跳的时候，忽然想起来了拿钱袋子，所以又从走廊里折回来了。・・・”②迷亭说：“他刚想洗，忽然想起来了拿钱袋子，才从走廊折了回来。・・・”		A-36	B-6	吾輩は猫である(我是猫①②)
	御馳走(ごちそう)が済(す)んで手を洗(あら)う水を硝子鉢(硝子鉢)へ入れて出したら、この下士(げし)官(くわん)は宴会(ばんかい)になれんと見えて、硝子鉢(硝子鉢)を口(くち)へあてて中の水(みづ)をぐうと飲んでしまった。	①饭后，拿出装在玻璃杯子里的水来的时候，那位下级军官大约对于宴会很少经验，竟把玻璃杯里的水一饮而尽。②餐毕，端来了玻璃瓶装的洗指水。那名下士似乎对宴会生疏，竟嘴对嘴地喝干了瓶口水。		C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
「コルドヴァさ。そこで地方(ちほう)の若い(わかい)ものが、女(め)といっしょに泳(およ)ぐ事も出来(こ)ず、さればと云(い)って遠(とほ)くから判(は)断(だん)その姿(すがた)を見る事も許(ゆる)されないので残念(ざんねん)に思(おも)って、ちよつといたずらをした・・・」		①独仙先生说：“地方叫做库多伐。当地的青年男子，因为不能和女人一块儿游泳，而在远的地方看又不能把体态看得清楚，认为非常遗憾，所以就开了一个小玩笑。・・・”②“柯尔道巴呀！那里当地的小伙子们不能和女人一同游泳，可又不许远远看清女人们的身姿。小伙子们觉得很遗憾，便开了个小小的玩笑……”		A-36	B-2	吾輩は猫である(我是猫①②)
吾人は自由(じゆう)を欲(ほ)して自由(じゆう)を得(え)た。		①“我们要求自由，获得了自由。・・・”②“我等盼望自由，也得到了自		C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)
自由(じゆう)を得(え)た結果(けつこ)不自由(ふじゆう)を感じ(かん)じて困(こ)っている。		①获得了自由的结果，又感觉到不自由而苦恼起来。②得到了自由的结果，却又感到不自由，因而烦恼。		A-57	A-35	吾輩は猫である(我是猫①②)
“不(ふ)、是(ぜ)金田(きんた)家の小(こ)姐(じよ)。说(い)真的(まこと)，我(わ)觉得很(じゆう)不好意思(いじやうし)。不(ふ)是(ぜ)，对(たい)方(かた)一(いち)再(また)求(もと)め我(わ)娶(よめ)了她(じや)吧(や)。终(ついに)于(に)这(こ)才(さ)才(さ)下(くだ)决心(けつごん)要(ほ)她(じや)。不(ふ)过(たゞ)，我(わ)觉得(じゆう)对(たい)不起(ご)寒月(さつき)先(せん)生(せい)，正(ただ)心(こゝろ)不(ふ)安(あん)呢(や)。”		①三平先生说：“不，是要了金田家的小姐。说起来怪有些抱歉的。可是人家直说要了吧娶了吧，终于我答应下来了，一一先生，然而我总觉得对寒月先生说不下去了，心里面直不安呀！”②“不，是金田家的小姐。说真的，我觉得很不好意思。不是，对方一再求我娶了她吧，娶了她吧，终于这才下决心要她。不过，我觉得对不起寒月先生，正心里不安呢。”		C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)

原文		訳文		分類一覧		作品名
会話文	地の文	会話文	地の文			
	秋風にがたつく戸が細目にあいてる間から吹き込んだと見えてランプはいつの間(ま)にか消えているが、		①秋風震动着纸门，从微隙处吹了进来，吹得洋灯不知什么时候熄灭了。②秋风敲打着屋门，只见从缝隙处钻了进去。不知什么时候油灯灭了。	C	C	吾輩は猫である(我是猫①②)